

この猫とともに生きる



石坂節子

山と溪谷社

まえがき

私は昨年ミレニアムに古稀を迎えながらも、一匹の猫と出会うことが出来ました。

二・五キログラムにも満たない小さな体の猫が私のパートナーとなって数多くの笑いや喜び、感動をもたらしてくれています。また、エネルギーの再生を手伝って生きがいを与えてくれていることをお知らせしたいと思います。

私が物心ついた頃には、家には小さくて黒光りした尾っぽのない日本テリヤがいました。抱いたり、おぶったり、着物を着せたり私のいい遊び相手でおもちゃでした。他にカナリヤやウグイスも飼われていました。戦時中も犬や猫を買っていましたので家の中に犬や猫がウロウロしていても、それは空気のような存在で当然家族という感覚で六十余年すごして来ました。母は子供や孫の世話をしつつ、常に二頭ぐらいの犬と、四、五匹の猫を多い時には七匹もいました。また、下宿人が拾ってきた子猫まで可愛がって育てていました。

その母が平成二年に九十七才で他界し、シャム猫のハーフとビーグル犬一頭が残されました。その時点から私一人での子育てが始まりました。母の三回忌も終え、平成六年七月に六十余年も生まれ育ち住みなれた神戸を離れ、父母の墓地のある千葉に転居してきました。犬と猫は航空便で運んでいただき、案じていました環境の変化にもなんとか馴染んでくれました。土地の人達には新住民と言われながらも、犬の散歩を通してだんだんと近隣の人達とも語り合える様になり、自治会のお世話が出来るまでになりました。犬や猫がジョイントになつて環を拡げてくれたこと、尊いさずかり物と感謝していました。

そんなとき、十九年も長生きしてくれた猫のプティーノも子孫を残すことなく老死し、三ヶ月後にビーグル犬のマーサもプティーノの後を追うように去ってしまいました。

“ミレニアム 如月五日 いとし犬は 追風うけて 急ぎ終焉ぬ”

この空虚さは筆舌に表現できません。町の一角に夕日の美しい地点があり、愛犬と歩を止め眺めたのですが、散歩コースへは足もむきませんでした。すっかり落ち込んでしまいました。

その頃、近くにある団地の林の中に宿なしの猫が五、六匹住みついていたのです。近くのKさんが食べ物を与えておられる様で、それが自治会の会合で問題になっていました。その猫たちが地域の人に疎ましがられるのは猫に非があるというより、転居や転勤で放置して行く人間の無責任、人間のエゴではないでしょうか。悲しくなりました。

Kさんと話し合い、これ以上繁殖しない様に出资し合って避妊・去勢のオペを近くの獣医さんにしていただくことにしました。自由な営みをしていた猫達は麻酔がきれる頃には、袋が空中を飛び跳ねるような状態でした。悠久からの生命を私達と同じ様に受け継いでいる同じ生物なのに、自然に生かしてやりたいと強く思いました。何かあの猫達に悪いこととしてしまった様な思いにも苦しみました。その様な思いで朝に夕にこっそりと林の猫達を見にフードを持って出かけました。私はのらちゃん達の足長おばさん続けました。でも家に帰ると淋しくなってしまう。

私には、もう生き物を飼うには時間が足りない。でも、動物と一緒に暮したい。そうは思っても先々のことを考えると、私がこの生き物の最後まで共に生きられるという自信も保証もないのです。無責任なことは許されません。こんなジレンマ―窮境にあった時、かかりつけの内科医の先生が「あなたがいなくなっても世の中には、また代わってみて下さる人がいるから大丈夫。猫ちゃんを飼いなさい。元氣を出して。落ち込んでいたら病気が勝ってしまいますよ」と、「猫ちゃんはお散歩がないから、年を重ねた人にはいいですよ、きつと生きる力が湧いてきますよ」と優しく励まして下さいました。

若い頃には自分が年を重ねるとどうなるかなど考えませんでした。周囲の人が老いていく姿はたくさんみてきましたが、それは、みんな人ごとでしかありませんでした。職についてからは仕事に没頭して、自分の親が年を重ねていることすら念頭にない日々をすごしていました。

私は十余年前にB型肝炎ウイルスキャリアという事がわかって以来、慢性肝炎ということで、一人暮らしの不

安や、病気に対しての恐れに心の平静を失い、自分を見失って、意欲のない無気力な暮しをし、時を浪費していました。自分の終着駅が近づいてきた今、もう何も出来ないに残りの日々の事を考えると焦燥するばかりでした。人は誰でも大なり小なりの不安や悩み事を抱えて、ストレスという重圧の中で生かされているんだから、私だけじゃない、この現在を目をしつかり開けて見定めなければならない。薬ばかり求め病気に引き込まれていては、時間がもったいないのではないかと思います。そして、主治医の先生のお勧めのお言葉を信じ、私なりに精一杯最後のチャンスを大切にトライしようと決意しました。

さっそく近くの本屋さんへ行行ってキャットの雑誌を手に入れました。幸にも町内にブリーダーの方がいらつしやるのが誌上でわかり、急いで電話をかけました。もうその時は自分の年齢のことも何もかも忘れ、あたりはバラ色でした。

そして初めて私の手のひらにのった小さな小さな可愛い茶色い猫、それがベティーだったのです。ブリーダーさんは、私の白髪を見られて少々不安を感じられた様でしたが、こころよく譲ってくださいる事になり、予約金を少し置き、帰宅しました。忘れぬうちに、用紙にアビシニアン、名前はアミークリスタル・ベティー、生年月日はミレニアム七月三日、ブリーダーさんの電話番号を書き入れ、カレンダーの絵のところへセロテープで張り付けました。

ブリーダーさんのお宅にはずらりと並んだ大きなリボン、それが何を意味するかさえ知らない私でした。「私も冥土の土産にあの大きなリボンが一つ欲しい。」と冗談めいて話してしまいました。「十一月の五日に東京でキャットショーがあるので出陳してみますか。」とブリーダーさんが誘ってくださいました。

十一月三日が私の古稀でした。キツツンの部で初めて出陳しました。あの猫は、四ヶ月と二日目ということ、会場では一番小さく赤ちゃんに見えました。でも、審査の結果、ファイナルに残り、一つ欲しかった大きなリボンを二つもいただきました。

子育てをした事のない私は、子どもがピアノの発表会に出て、皆さんに拍手された時のよろこび、書初展で入賞のリボンをつけていただいた時のよろこびを初めて味わいました。私の古稀に素晴らしいプレゼントをし

てくれたこの猫と、これからは心おだやかに暮らして行こうと思いました。

公園に住みついた猫たちに、避妊・去勢という断種行為に加勢した私、種を存続させる繁殖行為と断絶させる行為は全く正反対のことです。でもどちらも意味があり、必要不可欠なことなのでしょう。この行為の功罪をはつきり理解し、私は私なりに把握しなければならぬと強く思いました。キャットショーへの参加や、キャットクラブの会誌からお蔭様で段々と理解を深めることが出来ました。断絶させ、去ってしまった猫達には深く詫び、祈りたいと思います。その代わりにベティにいい子を授けていただき、種を存続させる、私の人生最後の努力をしたいと考えています。

最後に得た私の小さなパートナーは、実にいろいろな事をして、共同生活を楽しんでいきます。今こうして書いている時も、遊んで欲しいと自分から私の足につつかかってくる、机の上に来てペンを抑えたり、頭で私の腕を押し上げたりします。時には笑わせたり、びっくりさせたり、心配させたり、変化に富んだ鳴き声で話しかけてもきます。私もニャオーン、グルグルニャーンと呼応してやります。抱きしめずにはられない様な気分になります。その様な時折々の生活を、稚拙な表現ではありますが、散文詩として書き止めています。時には筆でスケッチしたり、篆刻をしてみたりと、この猫と共に今、桃源郷にあります。

この猫と心を通わせ、闘病生活をしながらひとり暮しを楽しめるものになっている老人のいやしタイムを少しでも多くの方に、特にお年を重ねた方々に、共有し、共感していただけたらこんな嬉しいことはありません。

この猫との出会いを大切に生きたいと願っています。

平成十三年十月

別離と出会い (一)

ミレニアム九月十九日

ママのおっぱいを充分に飲み終えた

一匹の子猫は

いよいよ離別の時がきた

何を思いピンクのキャリーバックに入っただろうか

不安か 恐怖か 新しい生活への期待か

疲れたのか 用意された

白いフアフアベットで

ねむってしまった

持たせてもらった

すずも おもちゃも

側に置いたまま



別離と出会い (二)

小さなこの猫は

我が家で

初めての朝を迎えた

あたたかくやわらかい毛に覆われた

母猫のおっぱいの香りはどこにもない

やる方ないこの猫は

私の体を思いつきり両手でモミモミし

グルグル グルグル喉を鳴らす

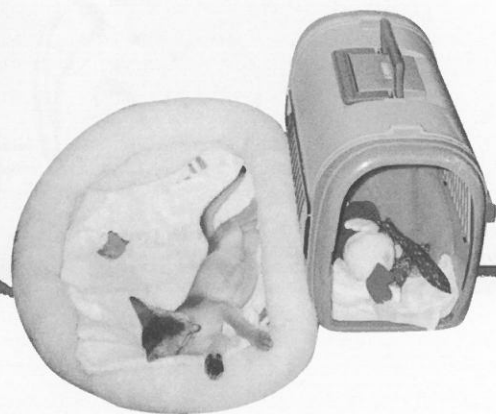
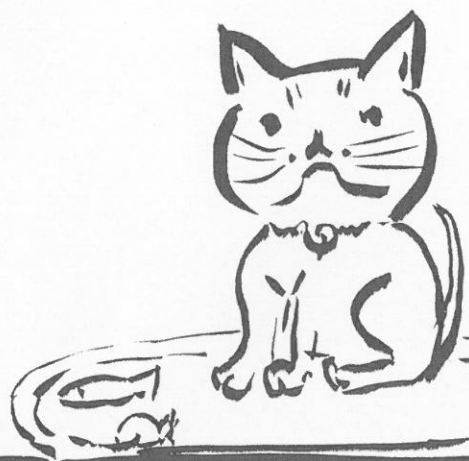
おっぱいが欲しいのだろう

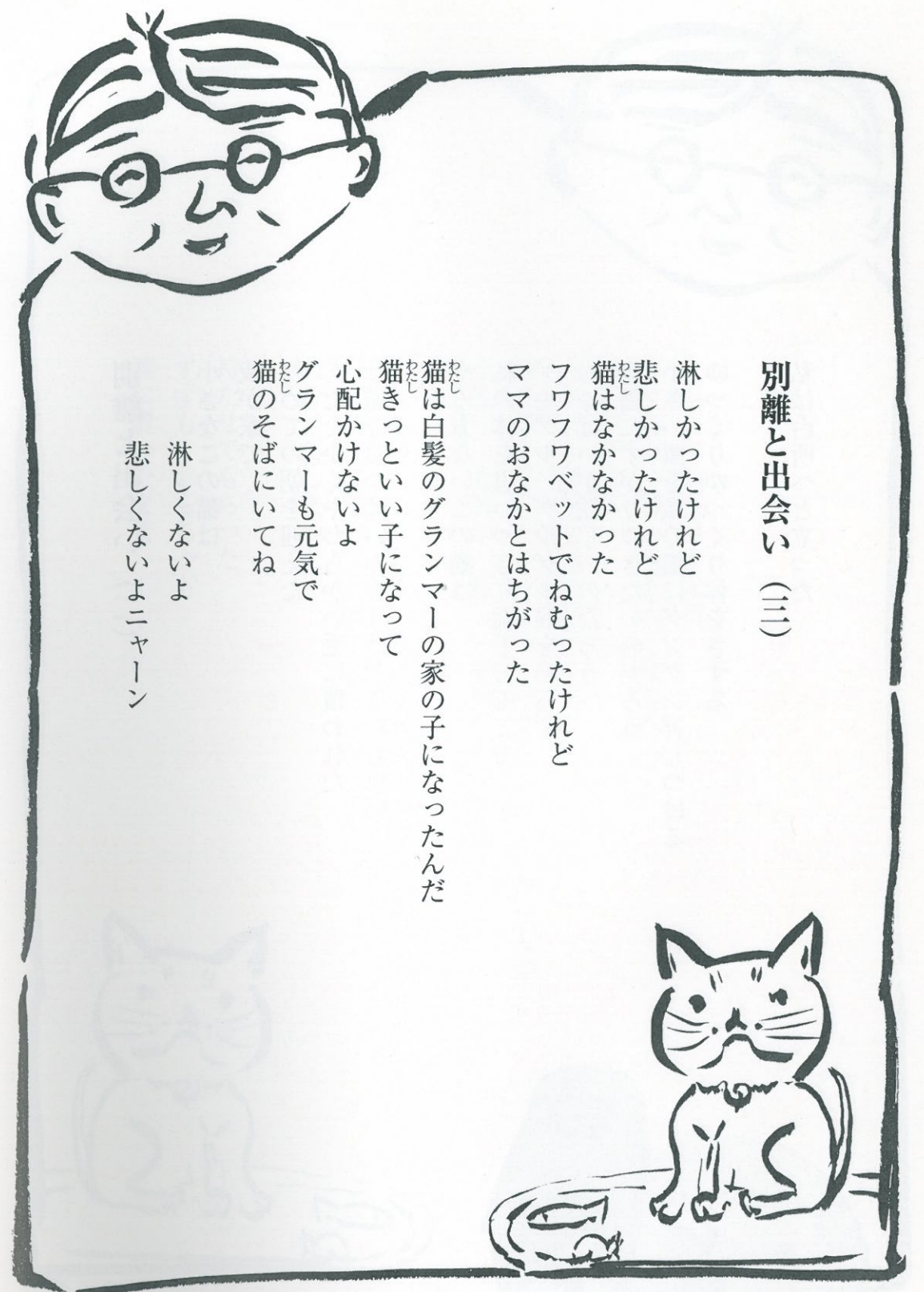
親猫にすがりつきたいのだろう

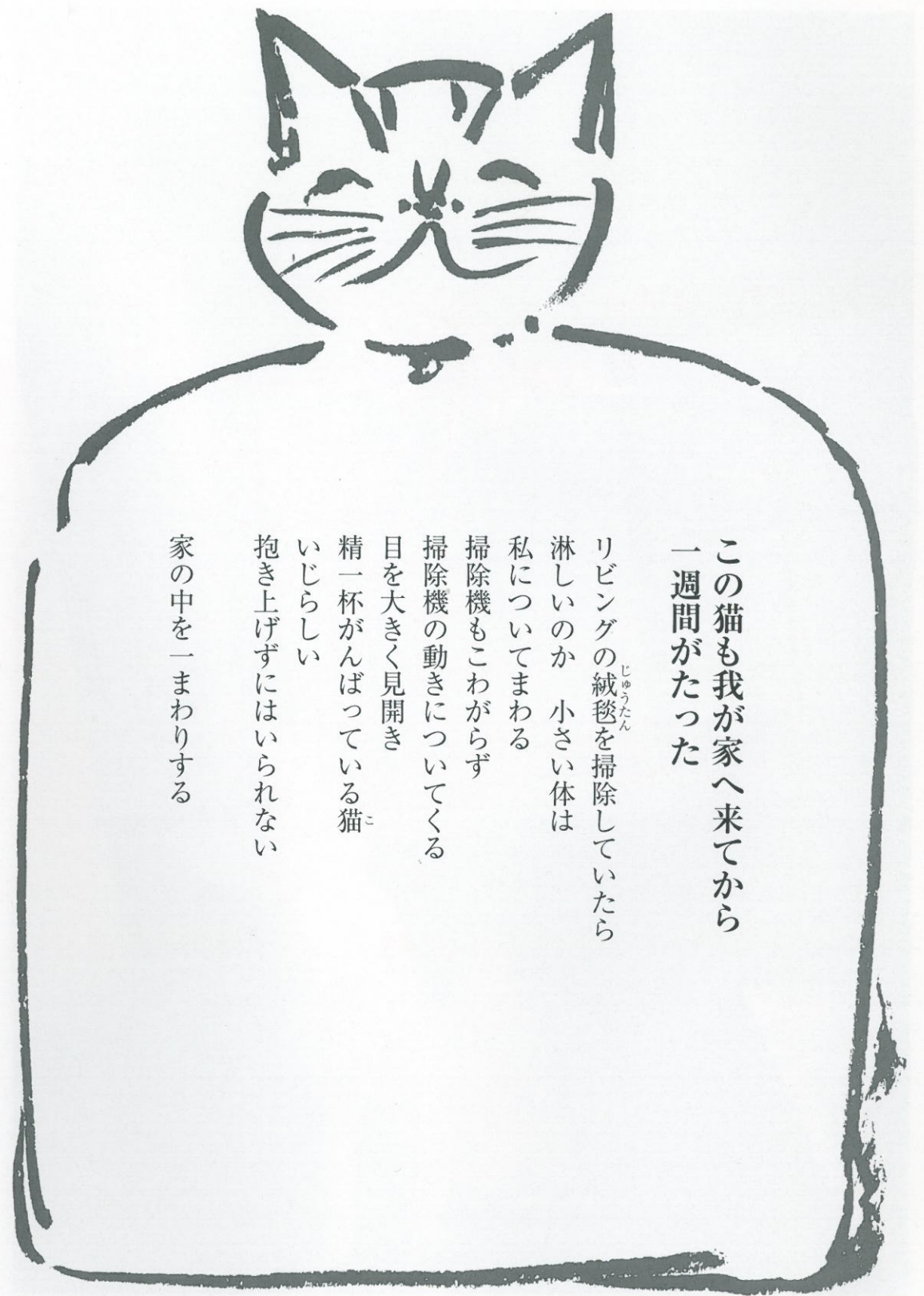
小さい頭を私の顔にグングン押しつける

ゆっくりゆっくり体をさする

私は台所へと立った







この猫も我が家へ来てから
一週間がたった

リビングの絨毯じゅうたんを掃除していたら
淋しいのか 小さい体は

私についてまわる

掃除機もこわがらず

掃除機の動きについてくる

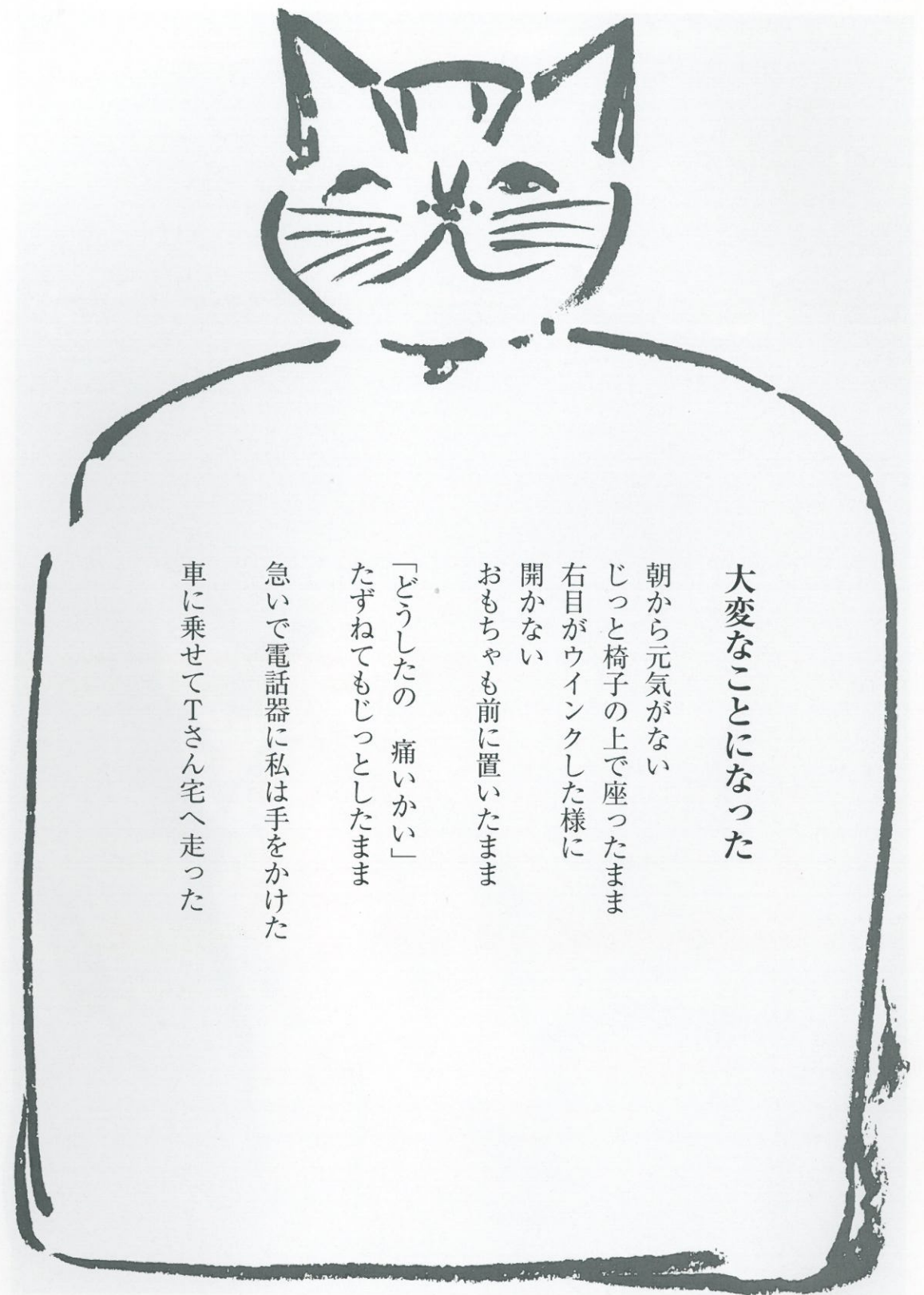
目を大きく見開き

精一杯がんばっている猫

いじらしい

抱き上げずにはいられない

家の中を一まわりする



大変なことになった

朝から元気がない

じっと椅子の上で座ったまま

右目がウイंकした様に

開かない

おもちゃも前に置いたまま

「どうしたの 痛いかい」

たずねてもじっとしたまま

急いで電話器に私は手をかけた

車に乗せてTさん宅へ走った



古稀^{こき}を迎えて

ミレニアム

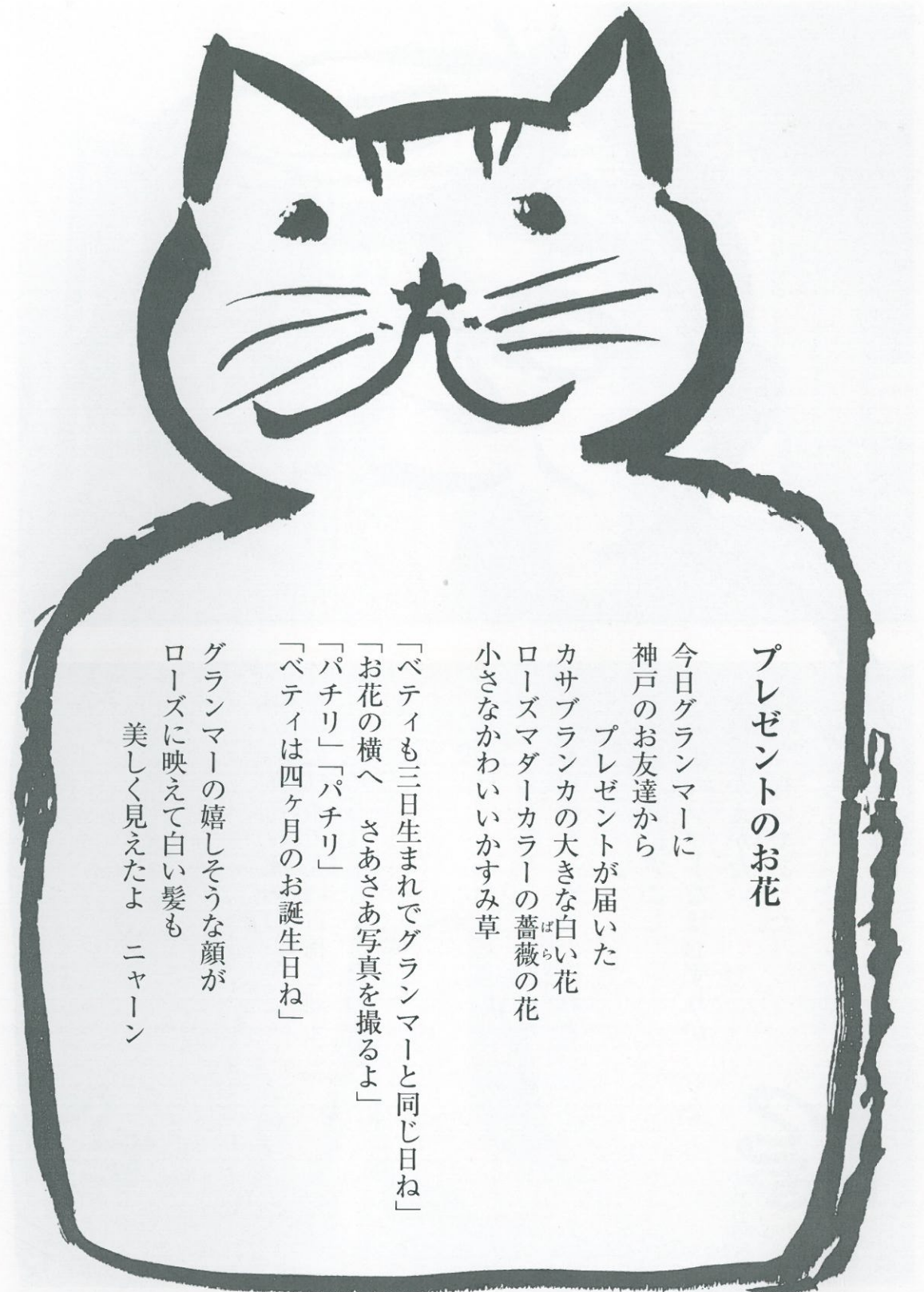
菊の香薫る文化の日

現代では希^{まれ}でない古稀を迎える
自身こんなに生きてきたのかと
信じがたい思い

生^{きず}を授けてくれた両親も亡く
ベティとふたりきりで迎えた古稀
赤飯も祝鯛もなかったけれど

この猫と共にすごし
この猫のソフトなほおずりが
何にもかえがたい
祝いであった





プレゼントのお花

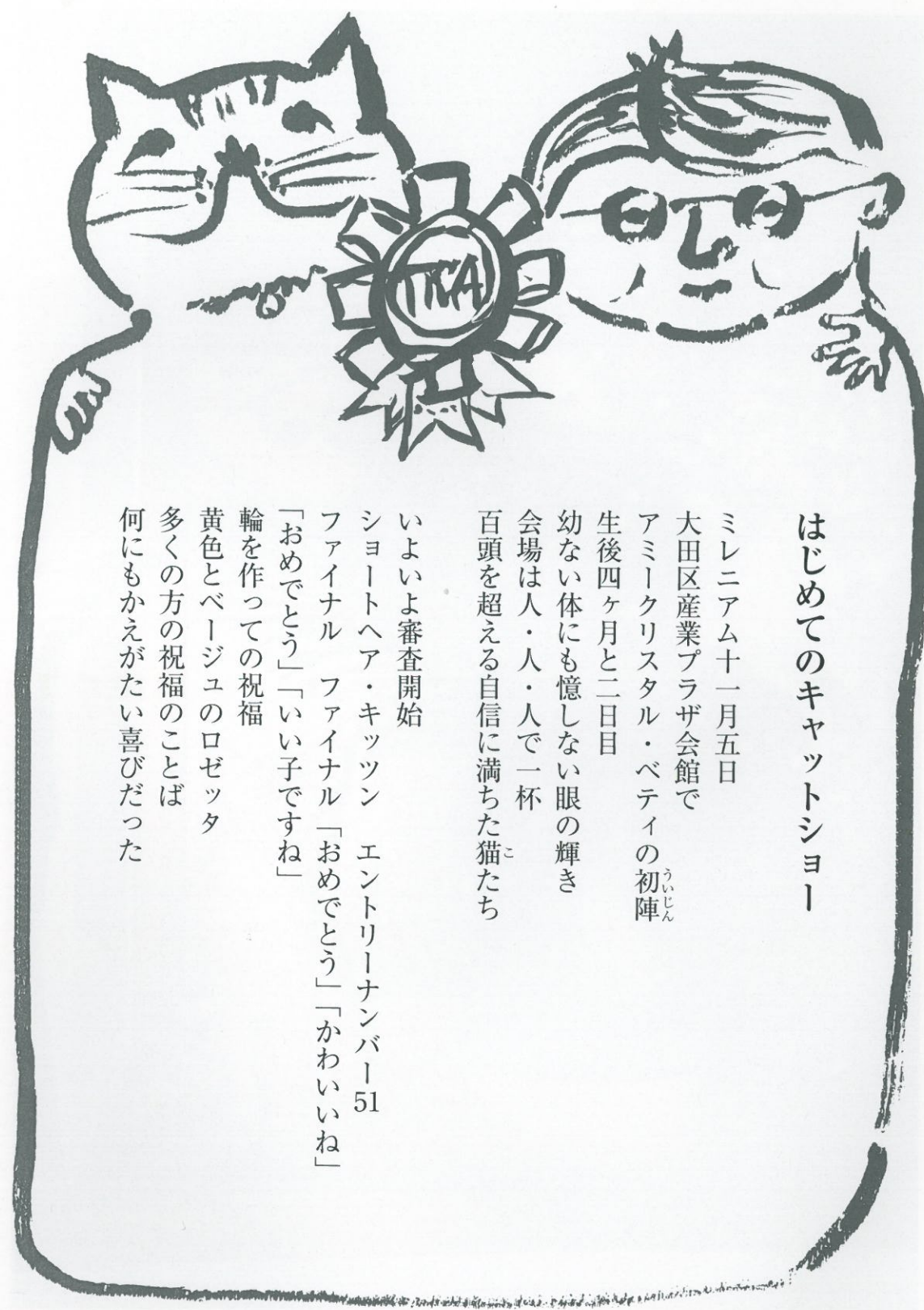
今日グランマーに
神戸のお友達から

プレゼントが届いた

カサブランカの大きな白い花
ローズマダーカラーの薔薇の花
小さなかわいいかすみ草

「ベティも三日生まれでグランマーと同じ日ね」
「お花の横へ さあさあ写真を撮るよ」
「パチリ」「パチリ」
「ベティは四ヶ月のお誕生日ね」

グランマーの嬉しそうな顔が
ローズに映えて白い髪も
美しく見えたよ ニヤーン



はじめてのキャットショー

ミレニアム十一月五日

大田区産業プラザ会館で

アミークリスタル・ベティの初陣 ういじん

生後四ヶ月と二日目

幼ない体にも憶しない眼の輝き

会場は人・人・人で一杯

百頭を超える自信に満ちた猫たち

いよいよ審査開始

シヨートヘア・キッツン エントリーナンバー51

ファイナル ファイナル「おめでとう」「かわいいね」

「おめでとう」「いい子ですね」

輪を作ったの祝福

黄色とベージュのロゼッタ

多くの方の祝福のことば

何にもかえがたい喜びだった



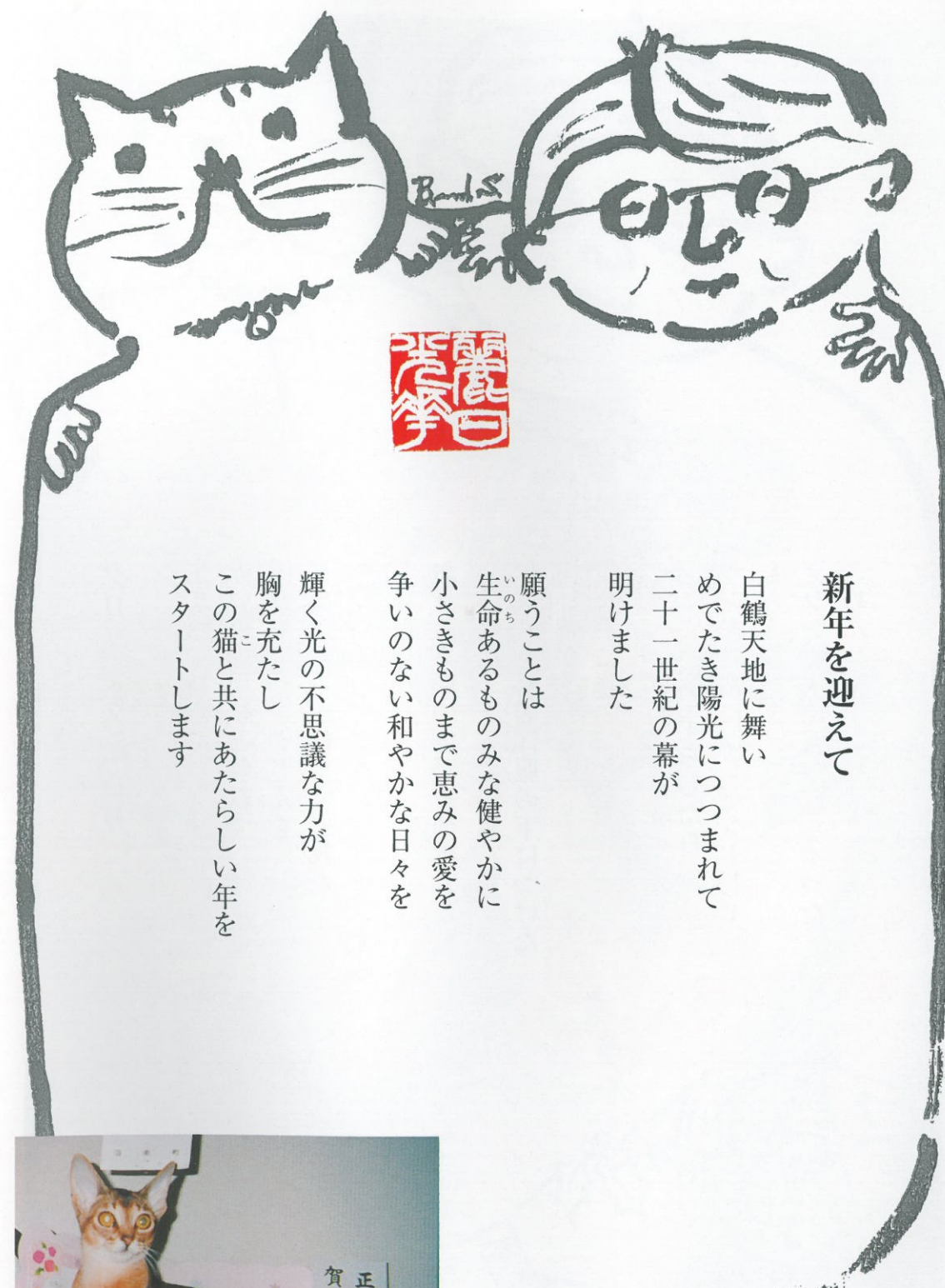
クリスマスかざり

生まれて初めてのクリスマス
赤い色画用紙と色紙で
円錐形のサンタさんを
グランマーが作ってくれた
糸でつるしてプラン、プランする

おもしろいので手を伸ばし
とらえようとしたら

サンタさんの洋服の下につけた
白い綿がふわりと
猫の手に着いてきた

「そんないたずらしたら
サンタさんにプレゼントして
もらえないよ」で
グランマーに言われちゃった
ごめんニヤーン



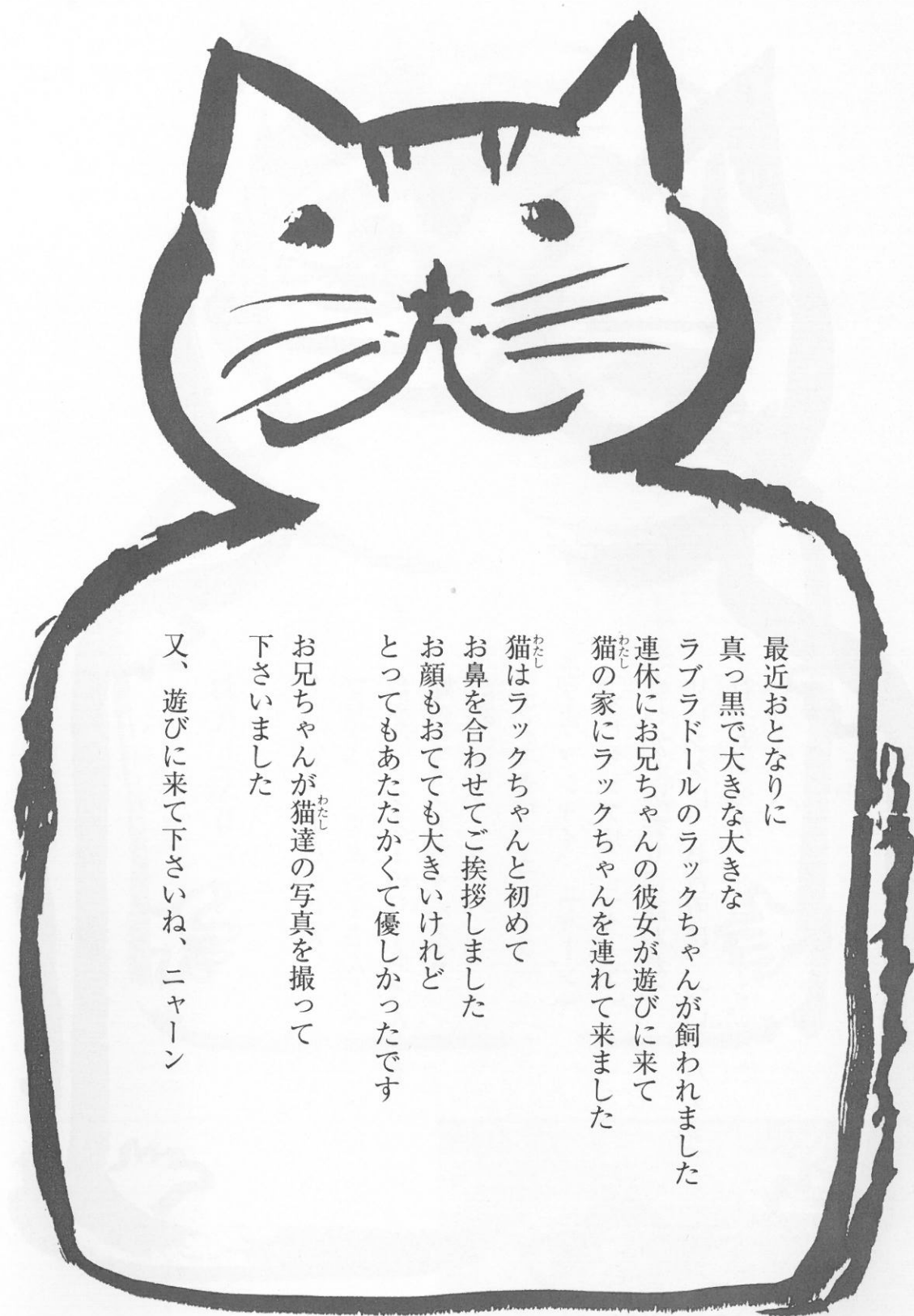




お久しぶり

久しぶりにお出かけた
ブリーダーさんのTさんちへ
ロシアンブルーのリーちゃんとも
妹のコメットちゃんとも
ごあいさつ
「コンニチワ、ニヤーン」
「イラッシャイ、ニヤーン」
「オヒサシブリ ニヤーン」
なつかしい香りに誘われて
リビングに、お台所に、つい、バスまで
行っちゃった。ニヤーン。





最近おとなりに
真っ黒で大きな大きな

ラブドールのラックちゃんが飼われました

連休にお兄ちゃんの彼女が遊びに来て

猫の家にラックちゃんを連れて来ました

猫はラックちゃんと初めて

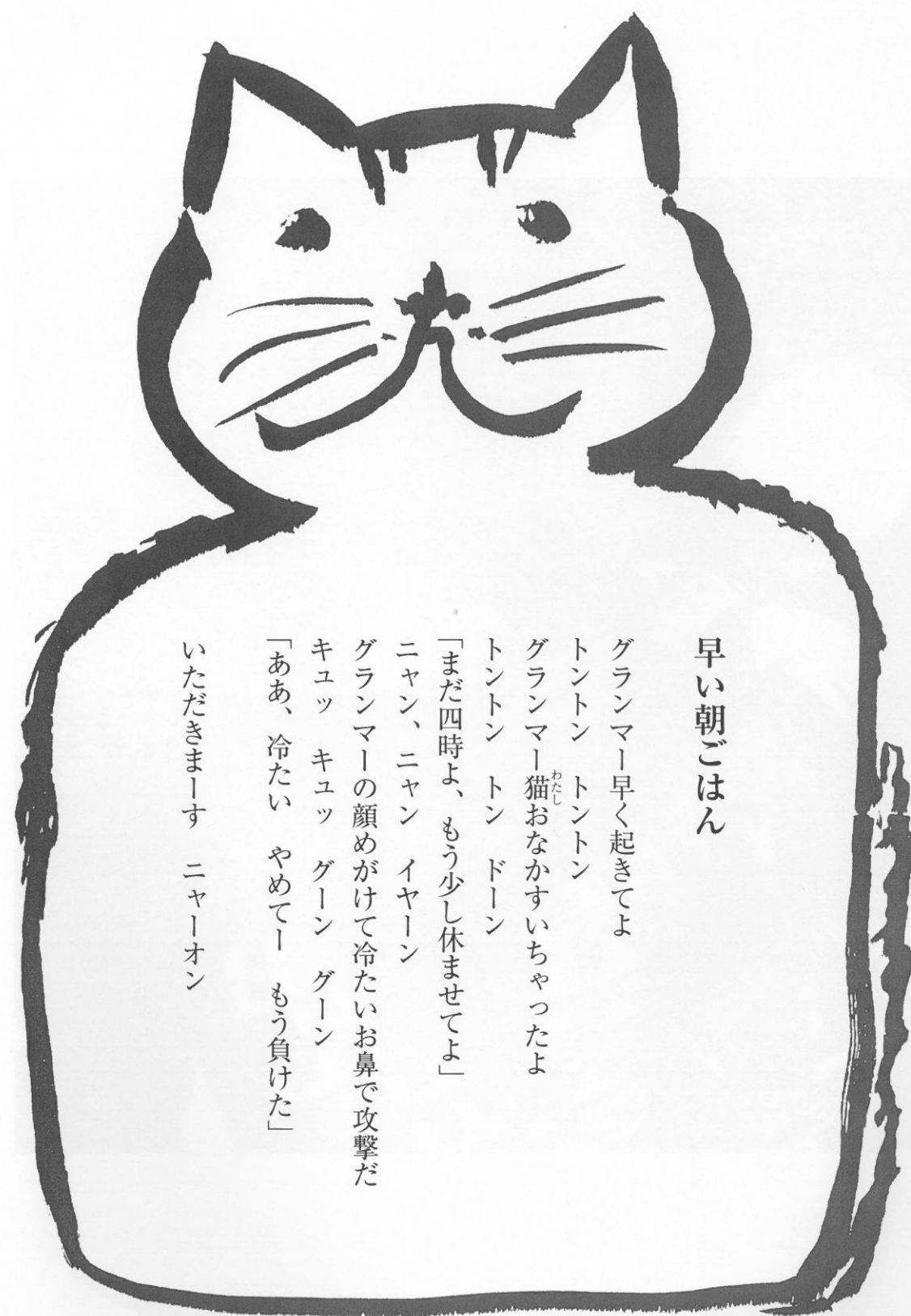
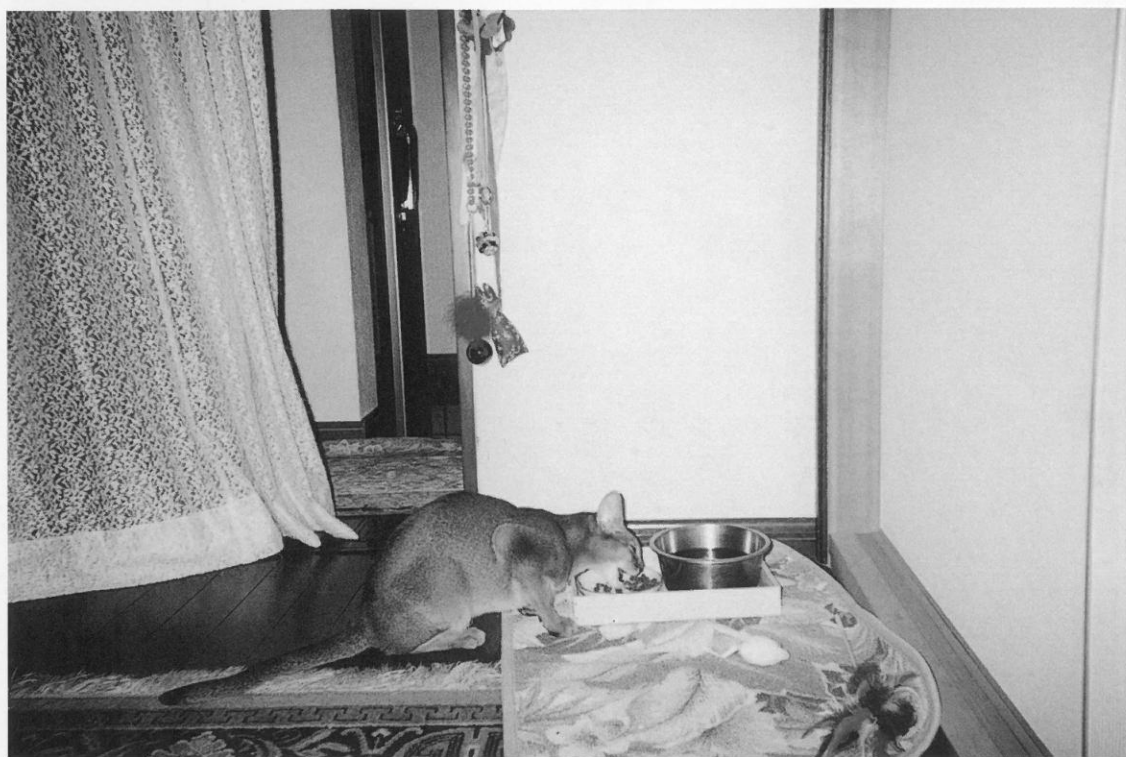
お鼻を合わせてご挨拶しました

お顔もおとても大きいけれど

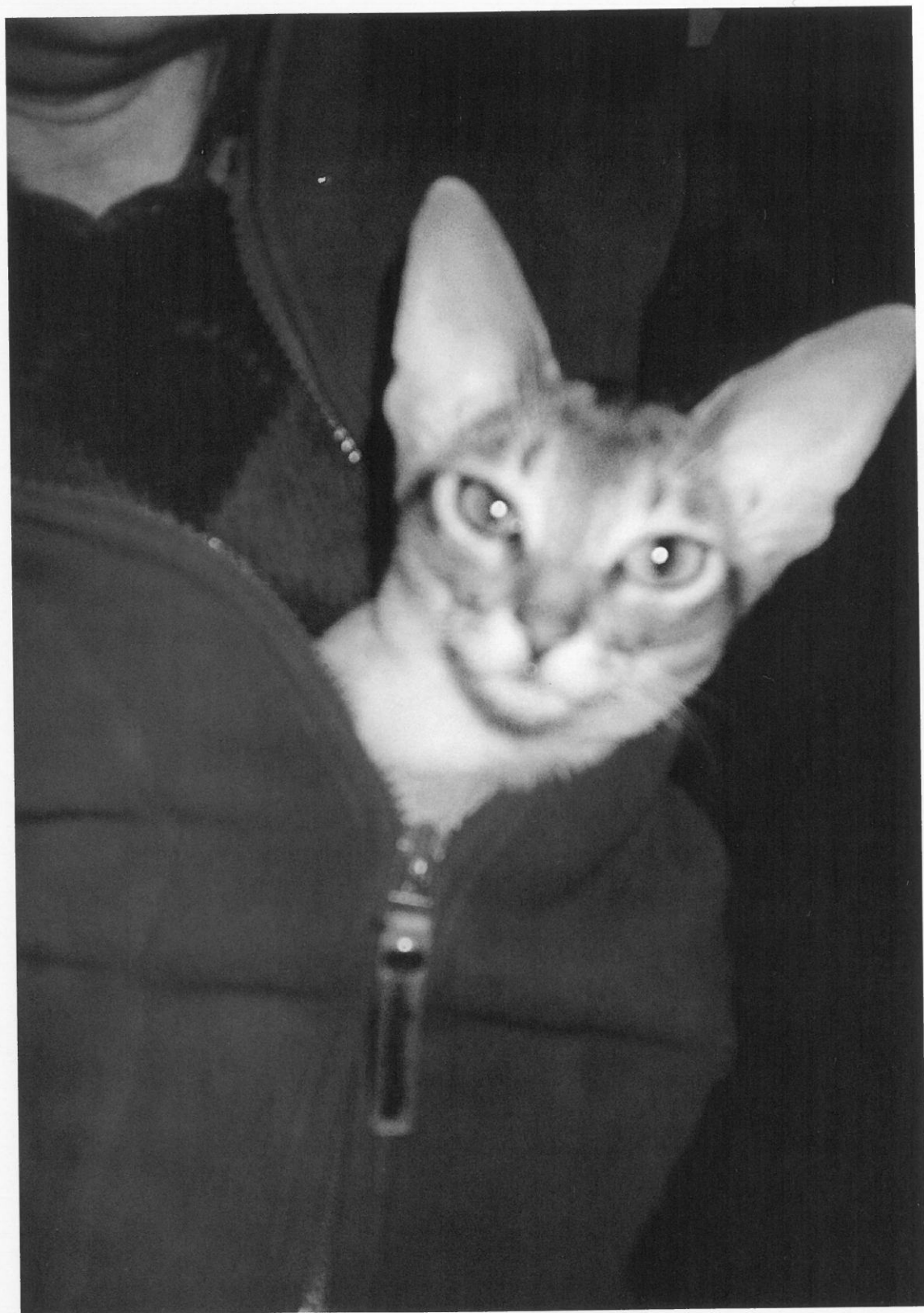
とってもあたたかくて優しくかったです

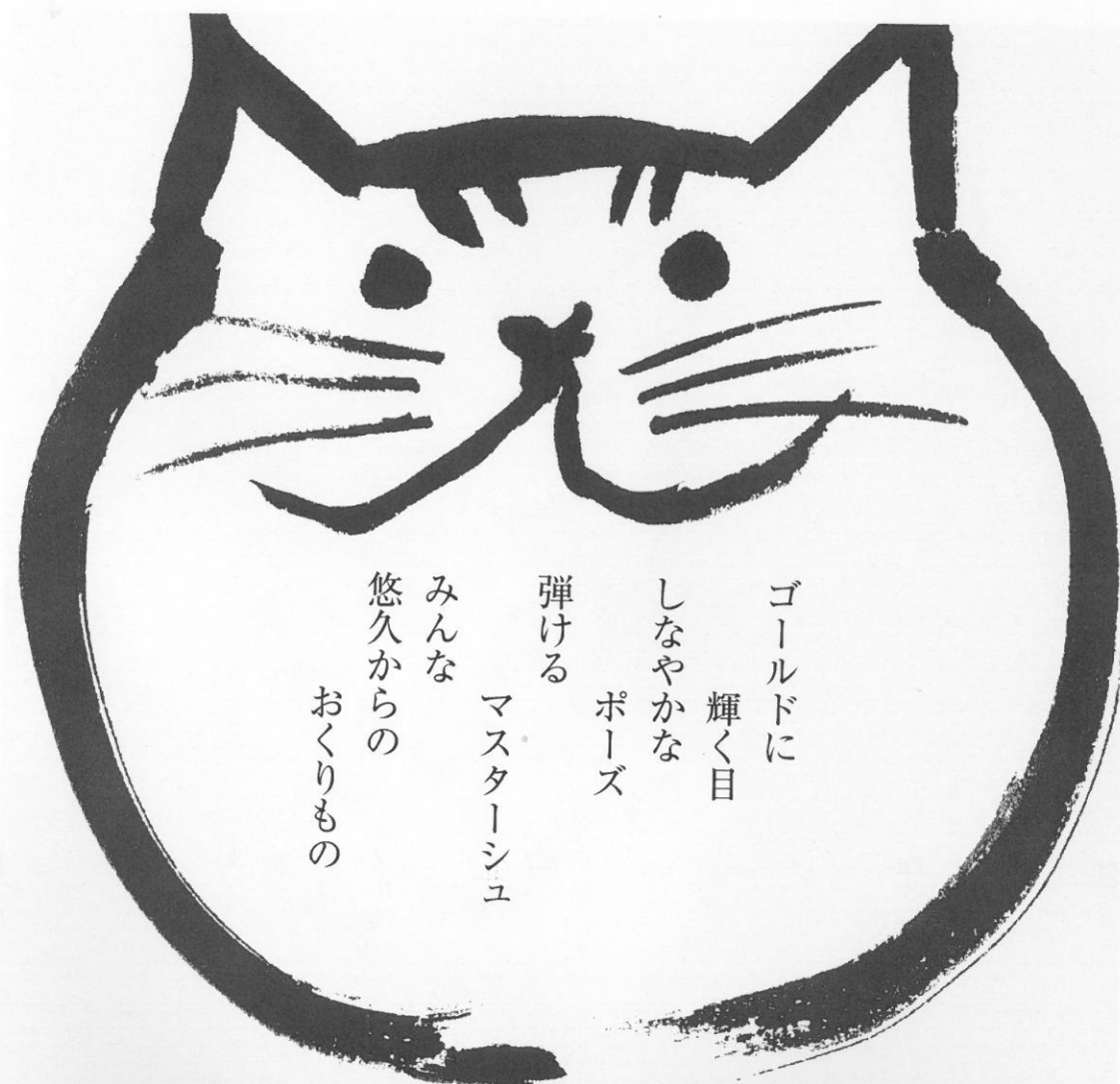
お兄ちゃんが猫達の写真を撮って
下さいました

又、遊びに来て下さいね、ニャーン

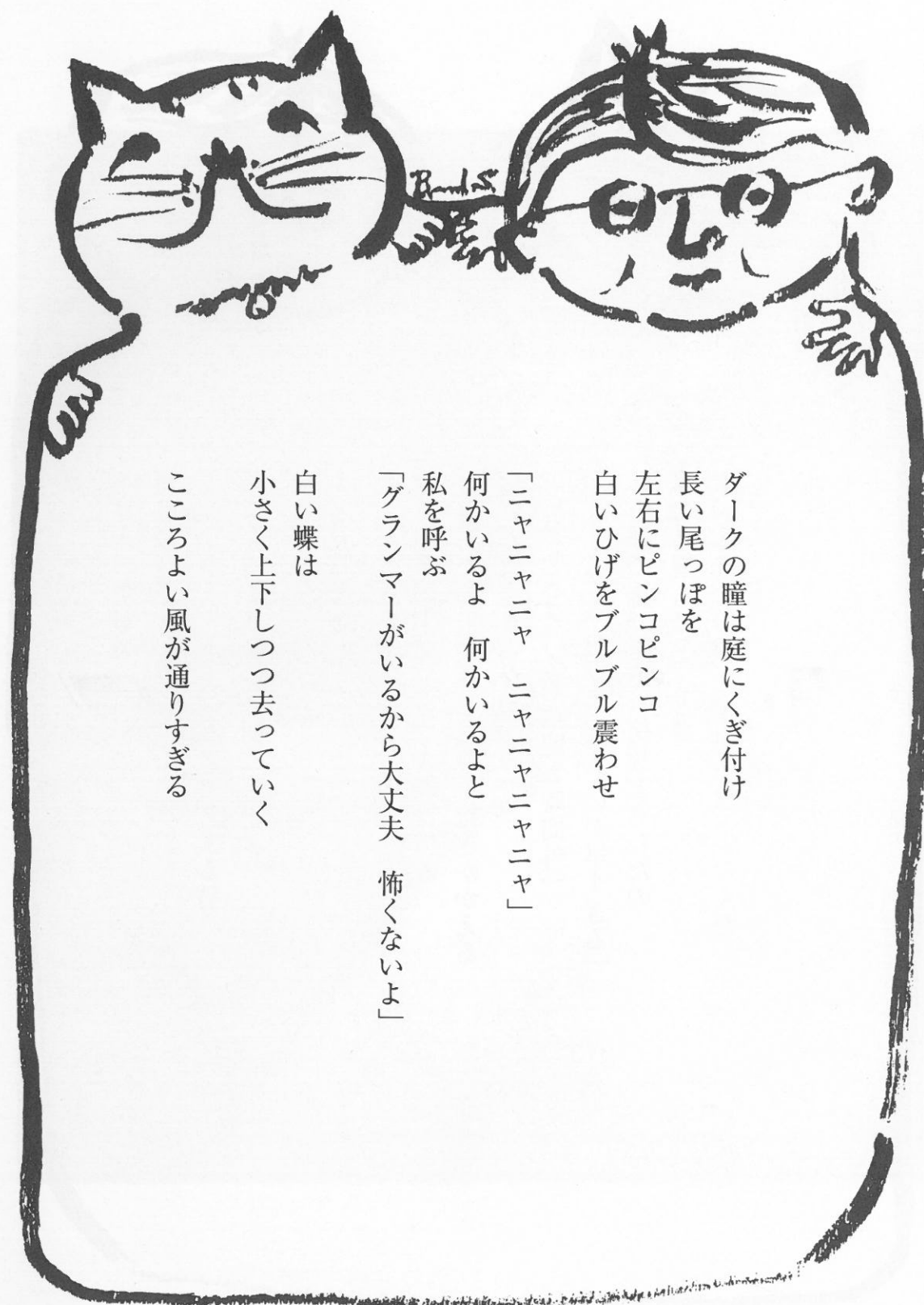
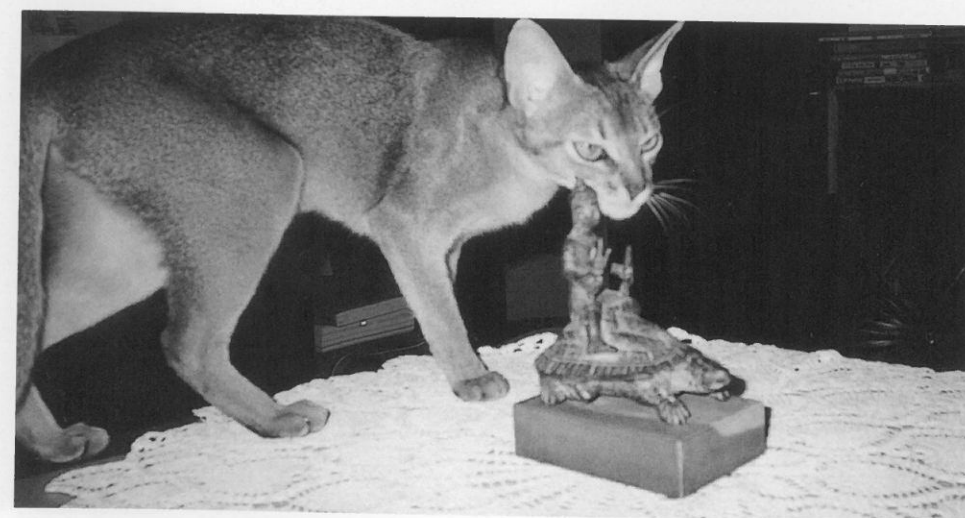




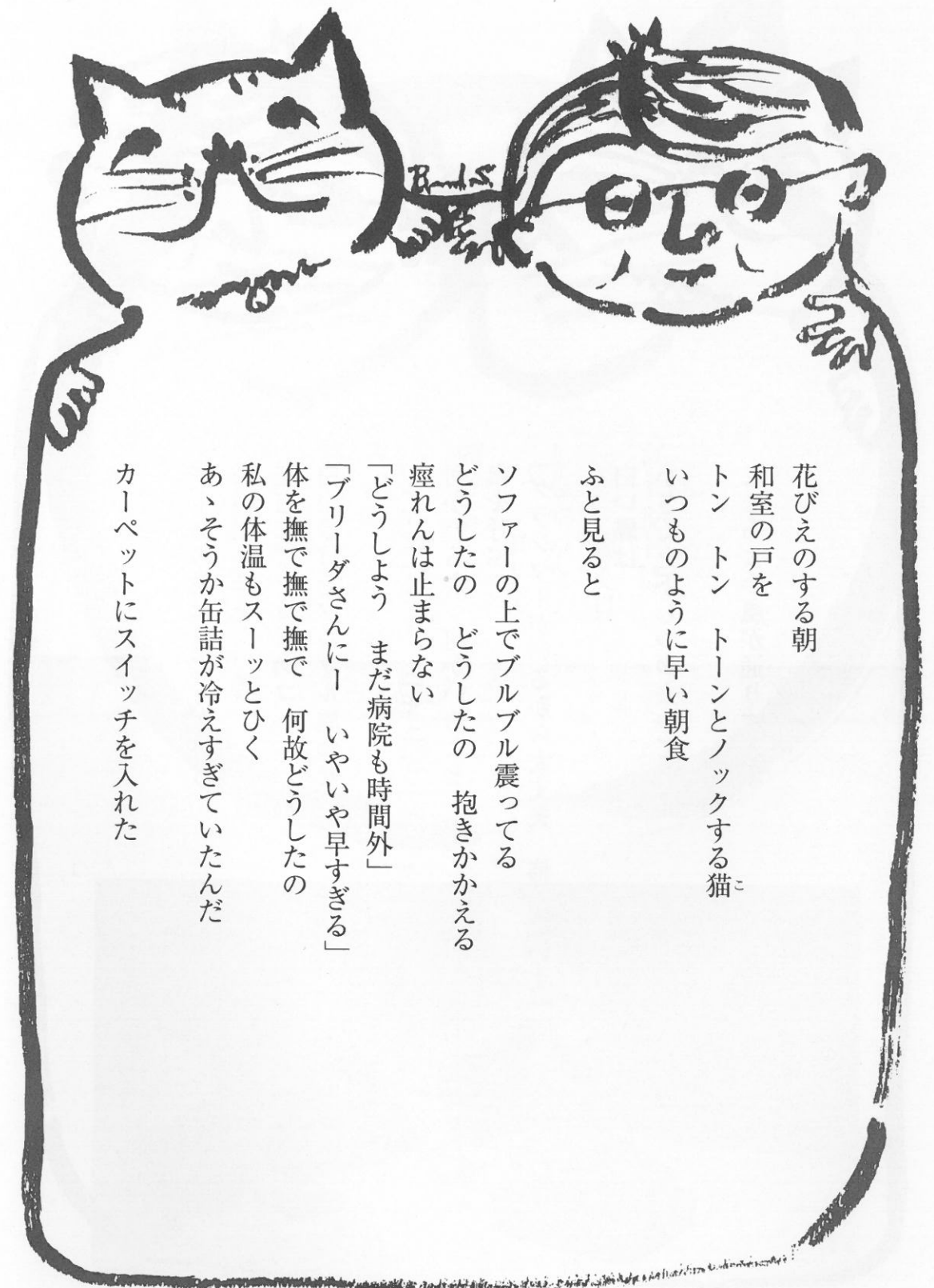




ゴールドに
輝く目
しなやかな
ポーズ
弾ける
マスターシユ
みんな
悠久からの
おくりもの



ダークの瞳は庭にくぎ付け
長い尾っぽを
左右にピンコピンコ
白いひげをブルブル震わせ
「ニヤニヤニヤ ニヤニヤニヤニヤ」
何かいるよ 何かいるよと
私を呼ぶ
「グランマーがいるから大丈夫 怖くないよ」
白い蝶は
小さく上下しつつ去っていく
こころよい風が通りすぎる



花びえのする朝

和室の戸を

トン トン トーンとノックする猫

いつものように早い朝食

ふと見ると

ソファアの上でブルブル震ってる

どうしたの どうしたの 抱きかかえる

座れんは止まらない

「どうしよう まだ病院も時間外」

「ブリーダさんにー いやいや早すぎる」

体を撫で撫で撫で 何故どうしたの

私の体温もスーッとひく

あ、そうか缶詰が冷えすぎていたんだ

カーペットにスイッチを入れた

トイのねずみ (一)

この猫が好きな
白いトイのねずみ
私の足にチョイ チョイと
さそいをかける
「チュッ チュッねずみ
どこへやったの」
電話台の下をのぞいたり
クリアボックスの下を――
同じように細い手を
ぐいぐい伸ばし捜す

自作のねずみ
取り出し棒で
「カタ カタ カタ」
やっと取り出せた
後ろ足立ちになって
ピョン ピョン
はねてついてくる
私の
いたずらっ猫



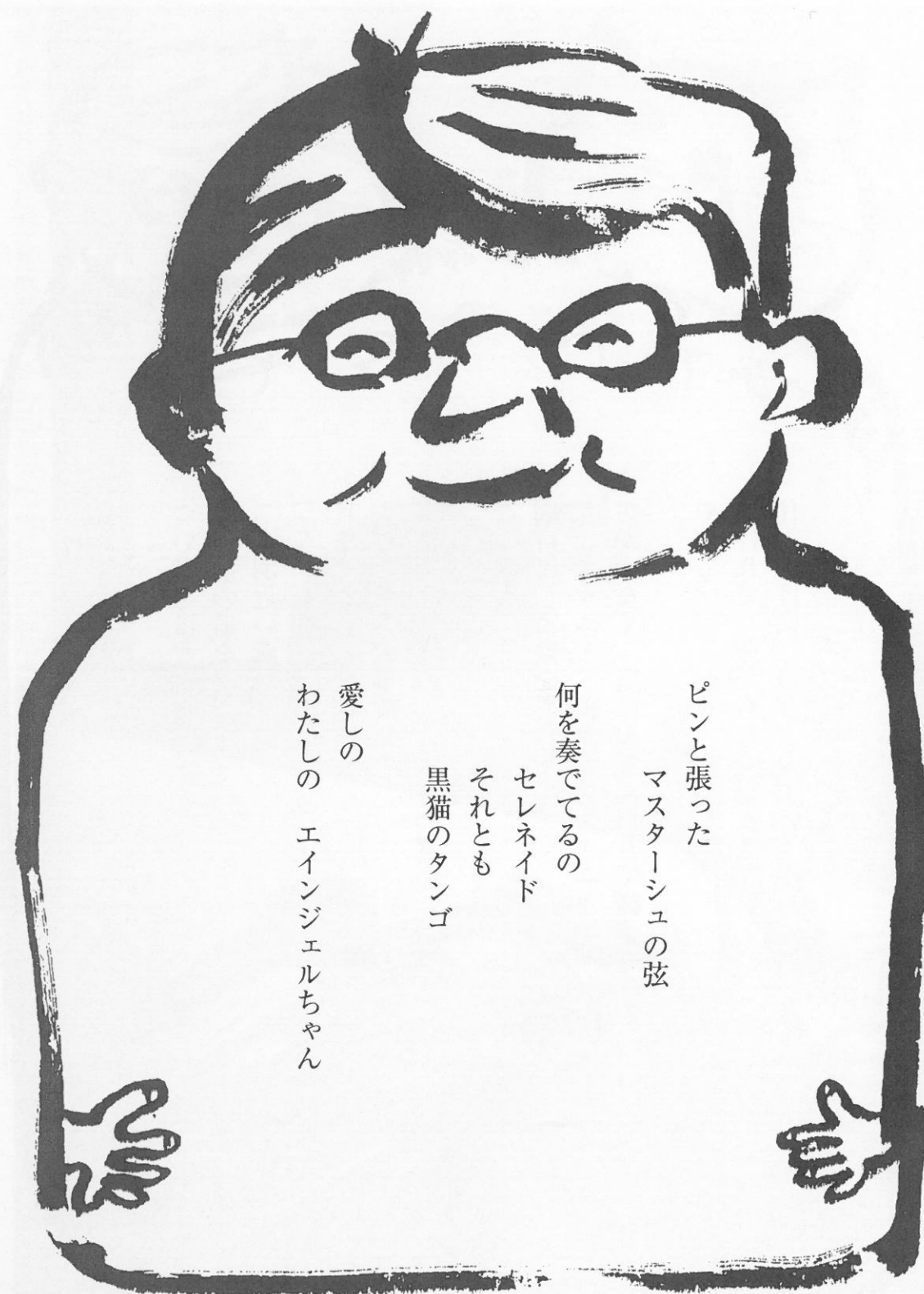
トイのねずみ (二)

早く遊ぼうと目を丸くし
白いラットの動きに
鬚も体も大反応
早く早くと叫んでる
「ポーイ」と投げると
ラットめがけてパーッと
その足の運びの速いこと
スタスタスタとくわえてくる
「ポロン」と一声かけると
私の側にポロンと置く

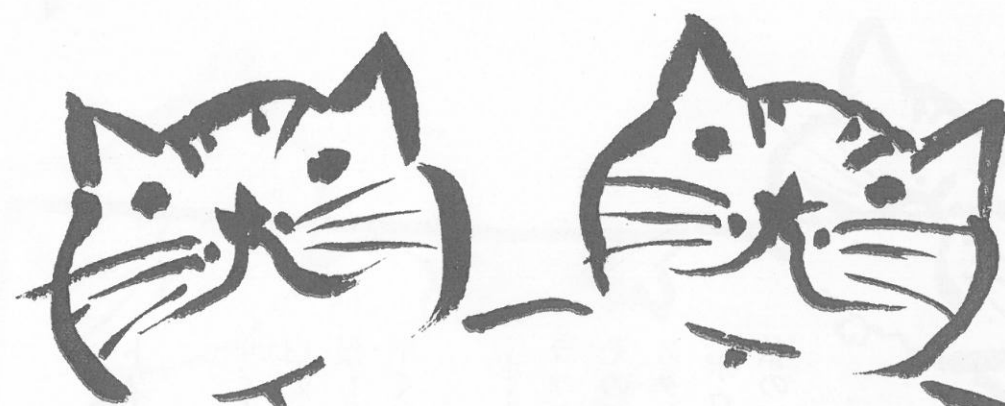
今度は
和室の方へ
「ポーイ」
メデイカルチェアを跳び越えて
スタスタスタ 「ポロン」
もっと もっと 何回も
小さな体は自信たっぷり

ほめ言葉をまつ
私の可愛い
いたずらっ猫





ピンと張った
マスターシユの弦
何を奏でてるの
セレネイド
それとも
黒猫のタンゴ
愛しの
わたしの エインジェルちゃん



姉妹再会の日

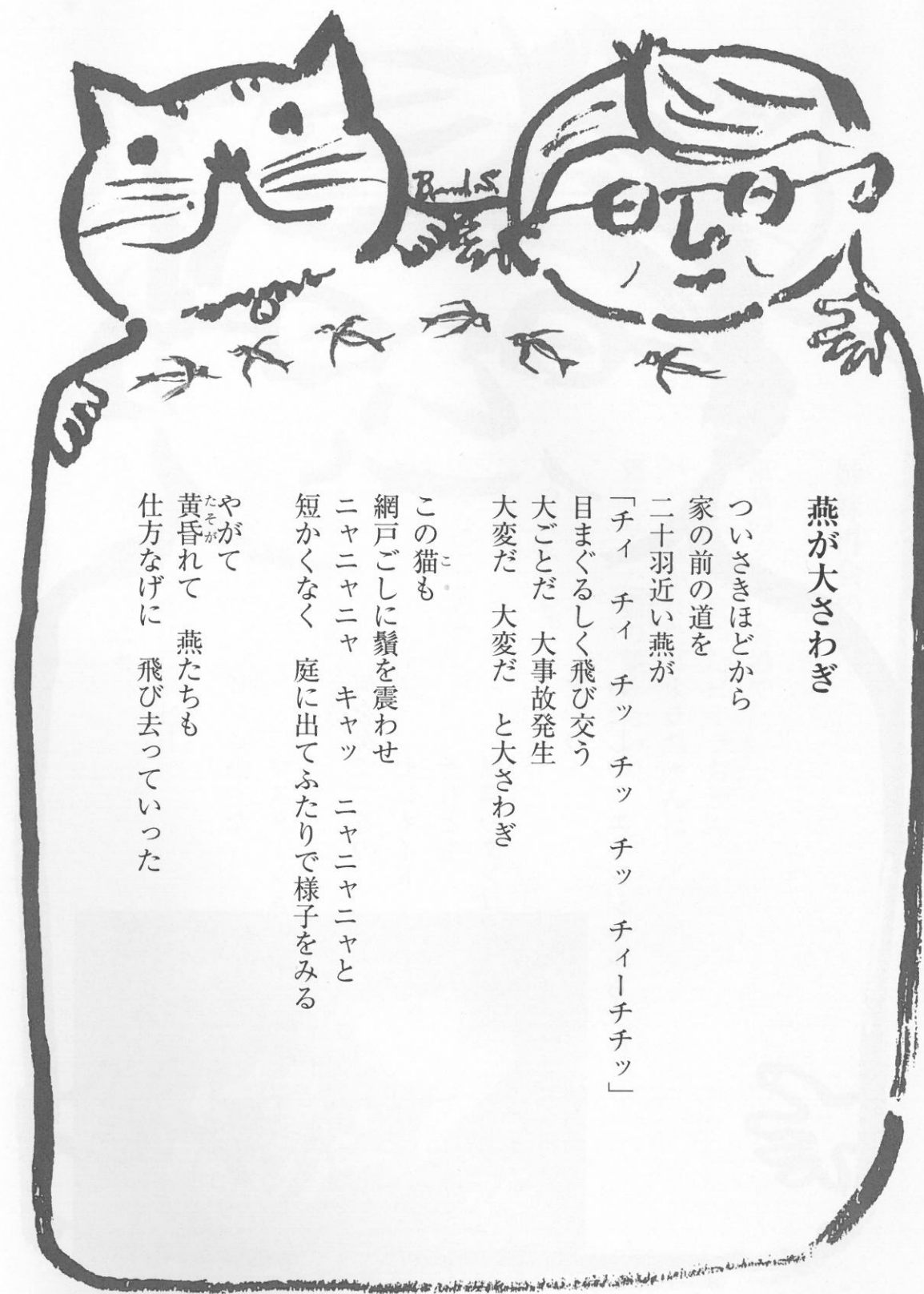
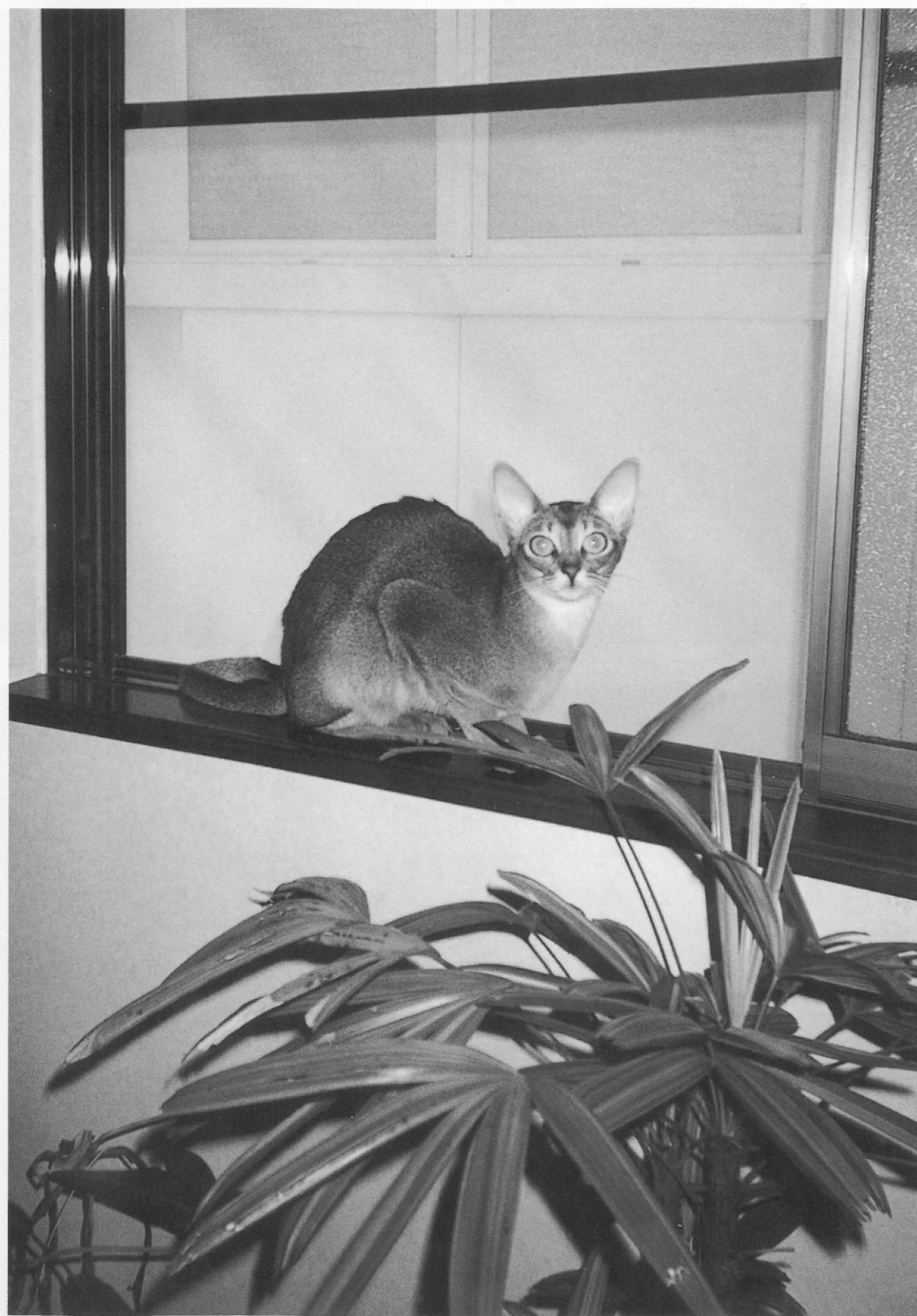
東京のショー会場で
久しぶりに会ったビオラちゃん
パパに抱かれたビオラちゃんは
鏡に写った猫の顔みたい

耳の大きさも
目も手も
みんな同じみたい
に似てる

ビオラちゃんのママが
「パチリ」と
写真を撮ってくださった

二〇〇一年五月二十七日
生後十ヶ月のこと





燕が大さわぎ

ついさきほどから

家の前の道を

二十羽近い燕が

「チイ チイ チッ チッ チッ チイーチチッ」

目まぐるしく飛び交う

大ごとだ 大事故発生

大変だ 大変だ と大さわぎ

この猫も

網戸ごしに鬚を震わせ

ニヤニヤニヤ キヤッ ニヤニヤニヤと

短かくなく 庭に出てふたりで様子をみる

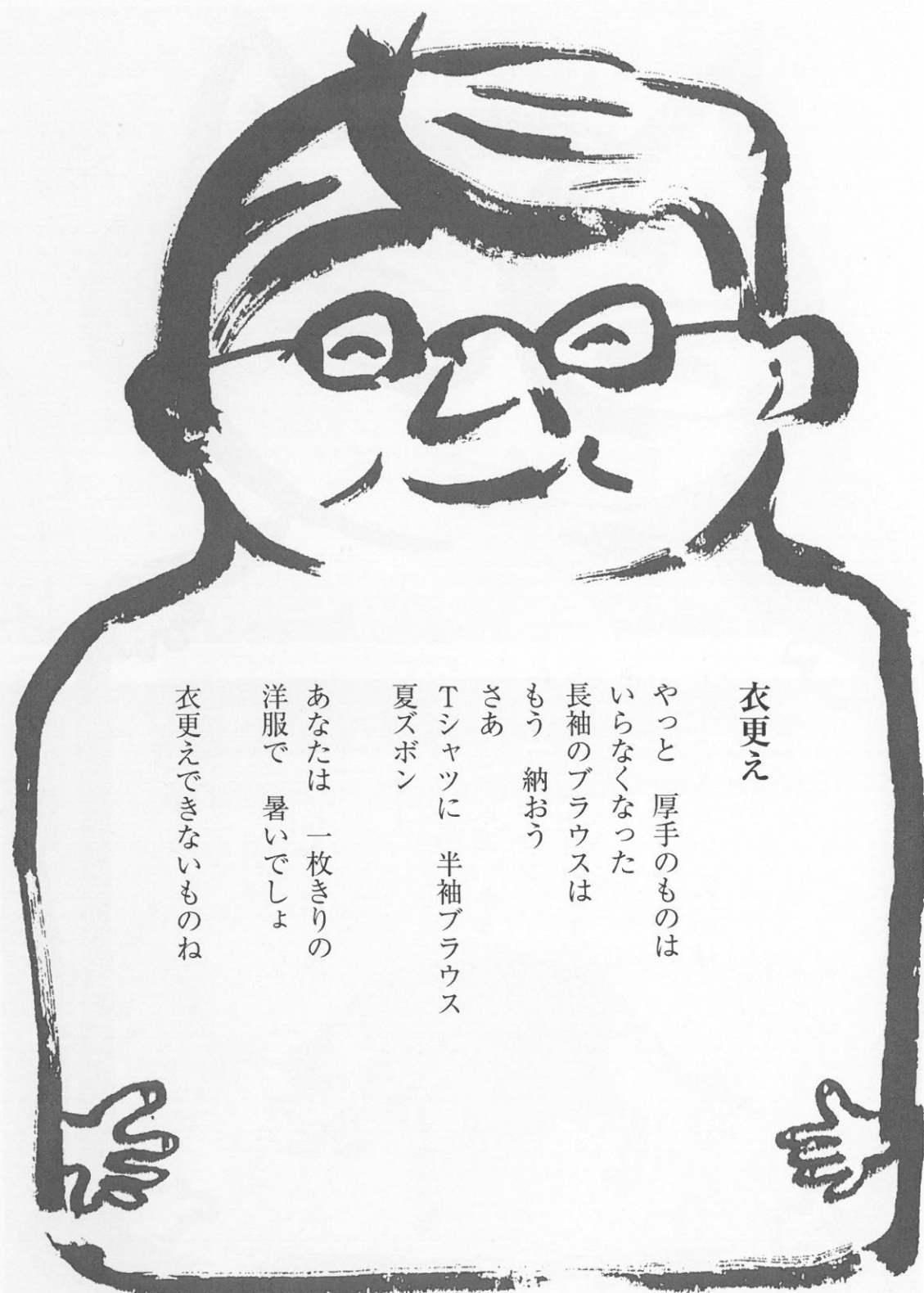
やがて

黄昏れて 燕たちも

仕方なげに 飛び去っていった

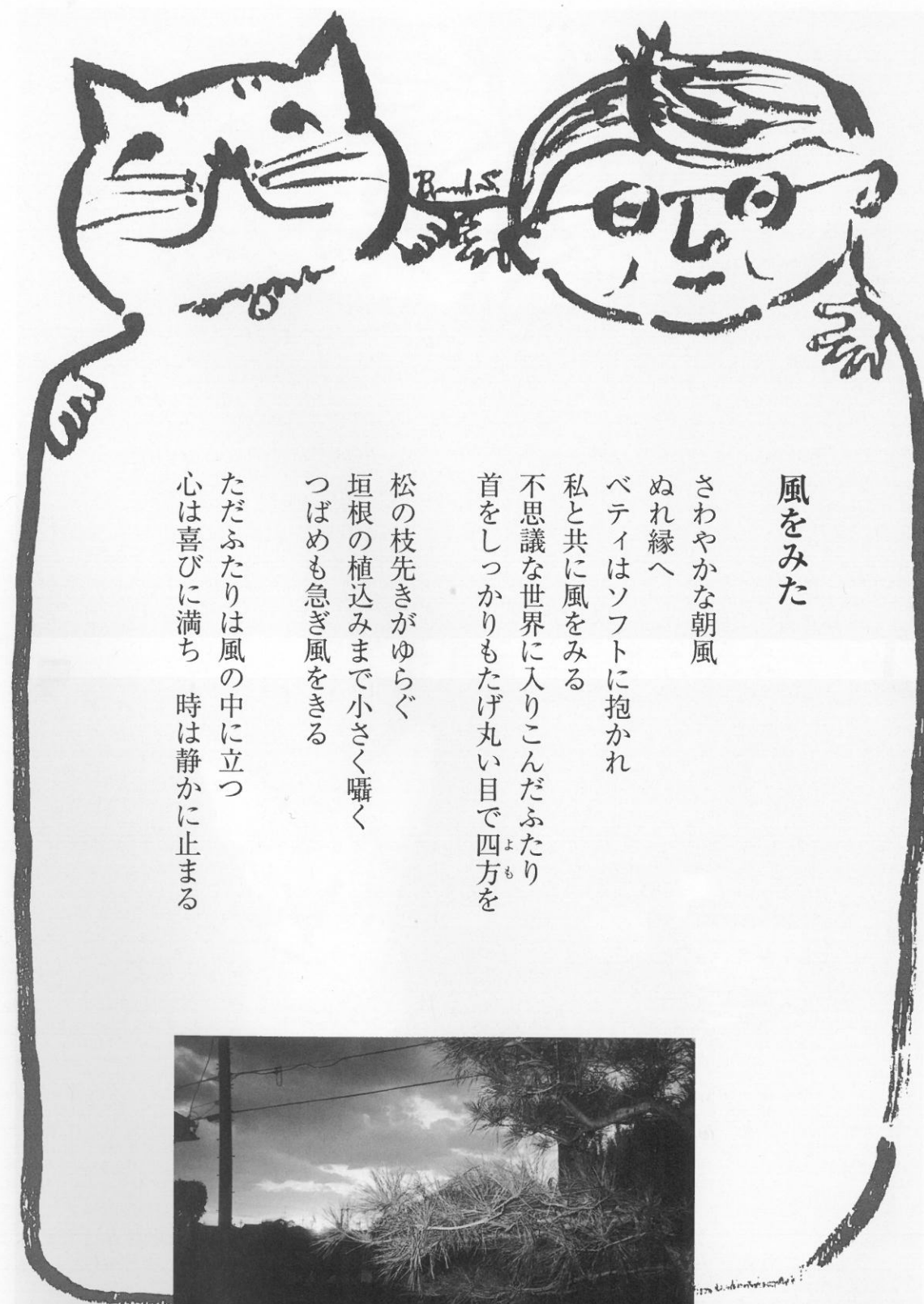


日が沈んでどのぐらい
 たっただろうか
 人影もない公園
 耳に入るものは風の音すらない
 霧がただよい
 一面がファンタジーの園
 この猫と園を漂泊う
 不安と喜びを表裏に
 公園の電灯はうすぼんやりと
 センチメンタルに私たちを包む
 ゆるやかな時の流れ
 明日はどんな朝が
 くるだろうか



衣更え

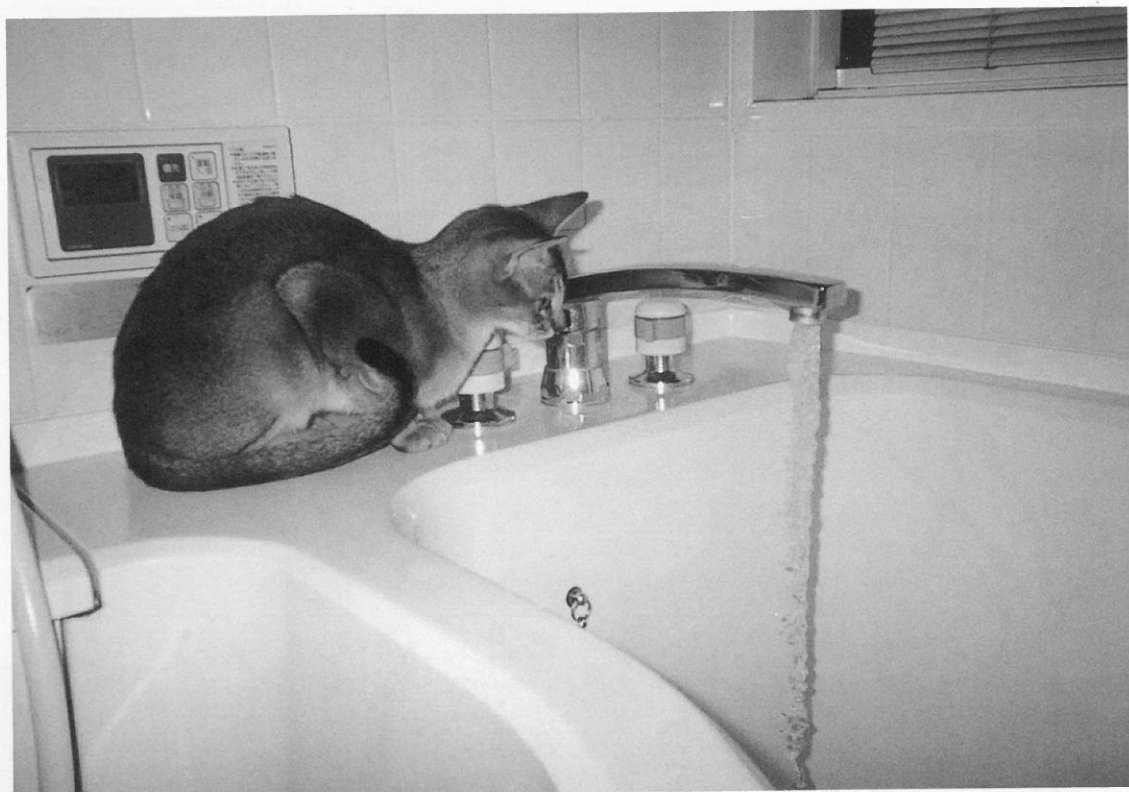
やつと 厚手のものは
 いらなくなつた
 長袖のブラウスは
 もう 納おう
 さあ
 Tシャツに 半袖ブラウス
 夏ズボン
 あなたは 一枚きりの
 洋服で 暑いでしょ
 衣更えできないものね

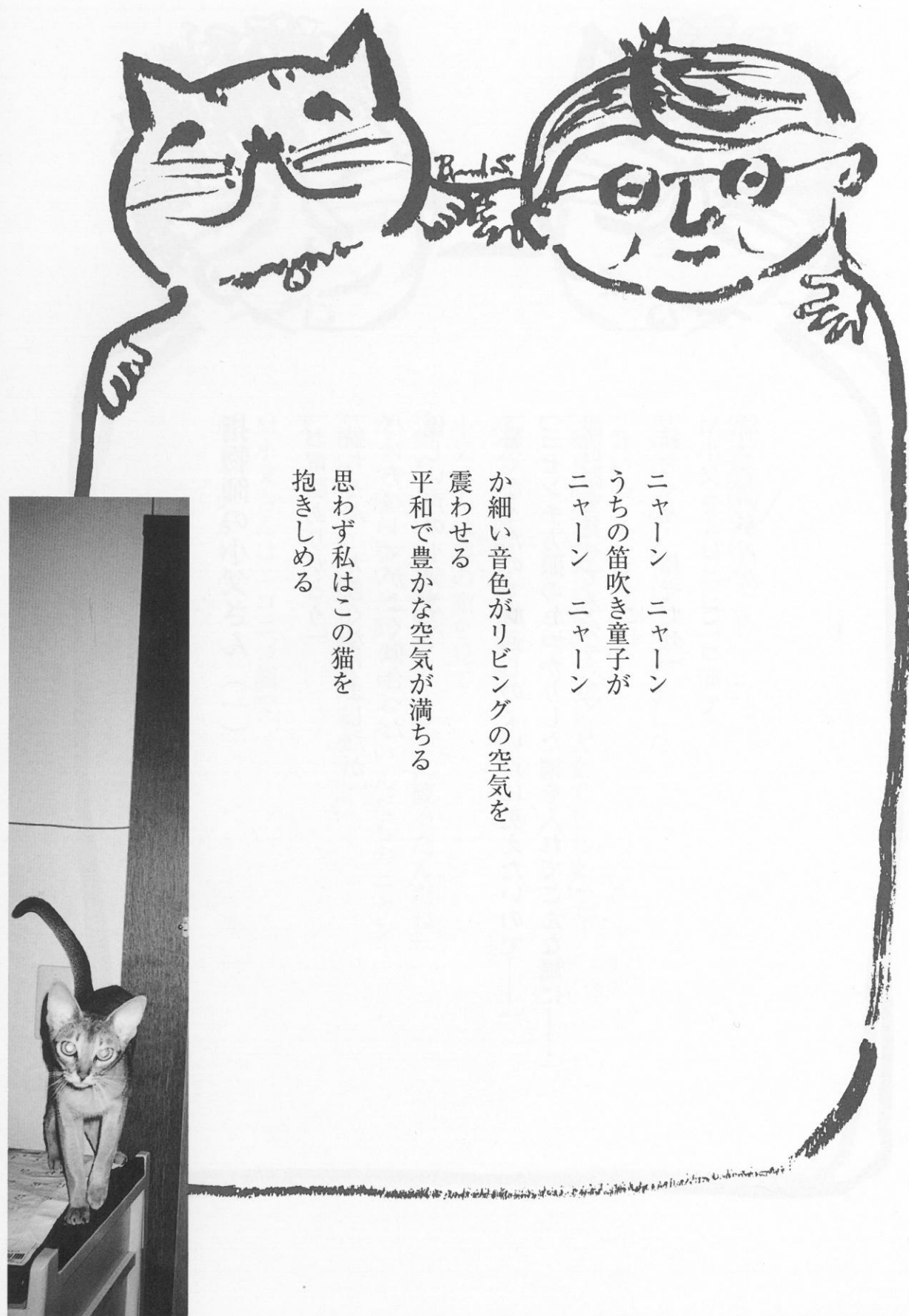


風をみた

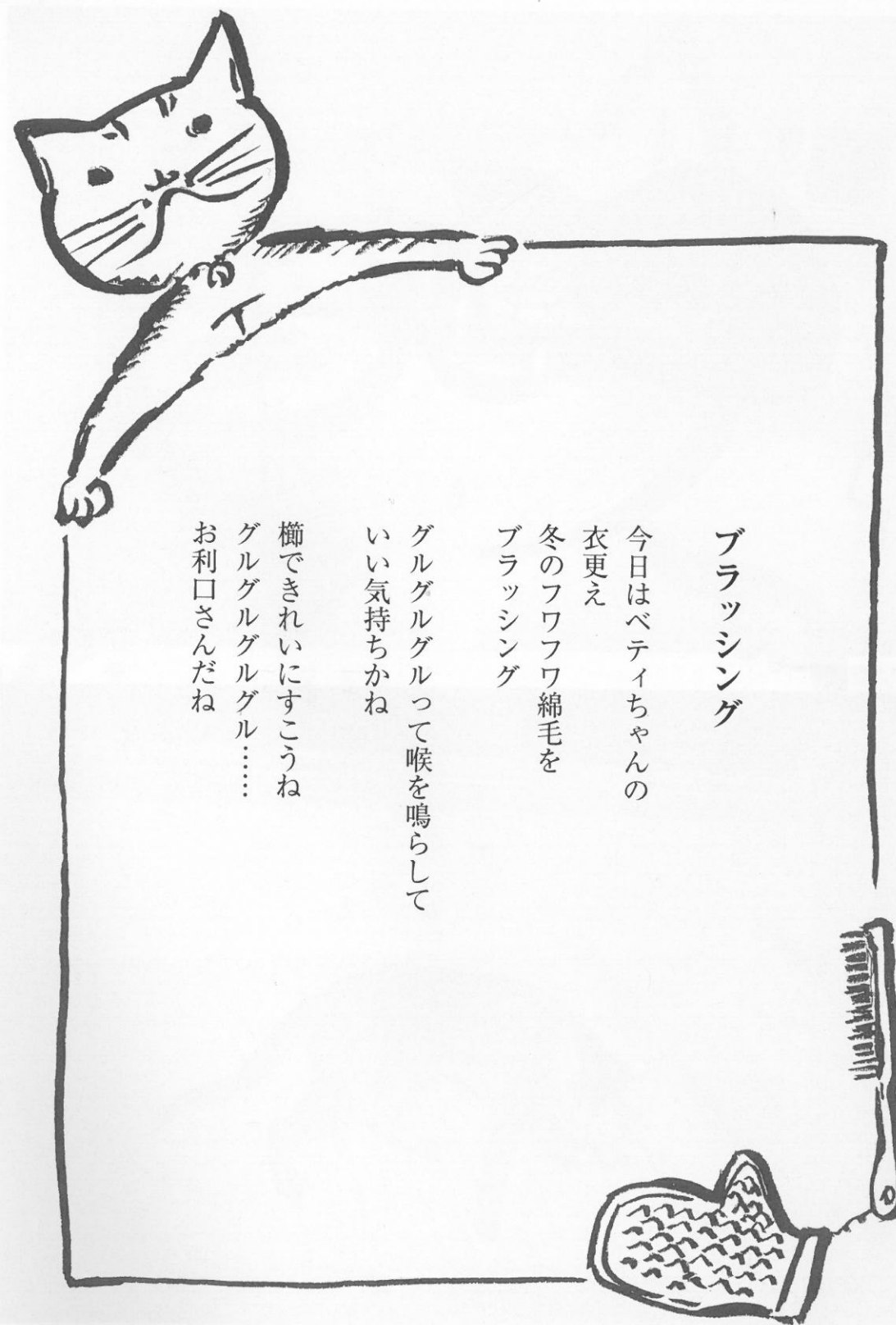
さわやかな朝風
 ぬれ縁へ
 ベティはソフトに抱かれ
 私と共に風をみる
 不思議な世界に入りこんだふたり
 首をしっかりとたげ丸い目で四方を
 松の枝先きがゆらぐ
 垣根の植込みまで小さく囁く
 つばめも急ぎ風をきる
 ただふたりは風の中に立つ
 心は喜びに満ち 時は静かに止まる







ニヤーン ニヤーン
うちの笛吹き童子が
ニヤーン ニヤーン
か細い音色がリビングの空気を
震わせる
平和で豊かな空気が満ちる
思わず私はこの猫を
抱きしめる



ブラッシング
今日はベティちゃんの
衣更え
冬のフワフワ綿毛を
ブラッシング
グルグルグルって喉を鳴らして
いい気持ちかね
櫛できれいにすこうね
グルグルグルグル……
お利口さんだね



指物師の小父さん (二)

「お電話ありがとう」

「猫ちゃん 大きくなりましたか」

パンチパーマがよく似合った

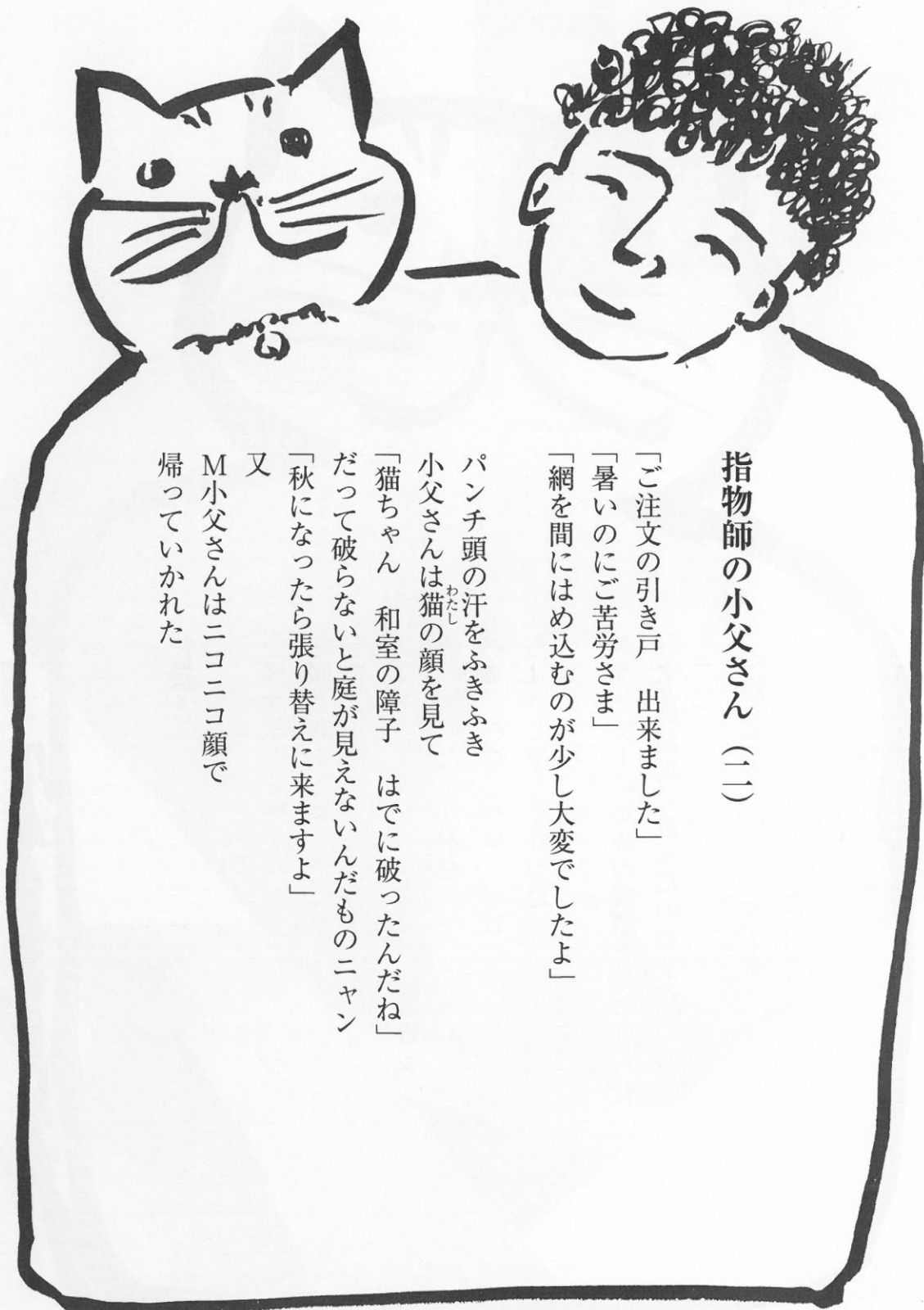
優しい声の小父さん

「暑くなったので風通しのよい戸に更えたいので——」

「三センチ方眼のしっかりした網を入れてこんな風に——」
設計図を見せてるグランマー

「猫ちゃん 倅せだね」

M小父さんはニコニコ顔で
帰っていかれた



指物師の小父さん (二)

「ご注文の引き戸 出来ました」

「暑いのにご苦労さま」

「網を間にはめ込むのが少し大変でしたよ」

パンチ頭の汗をふきふき

小父さんは猫の顔を見て

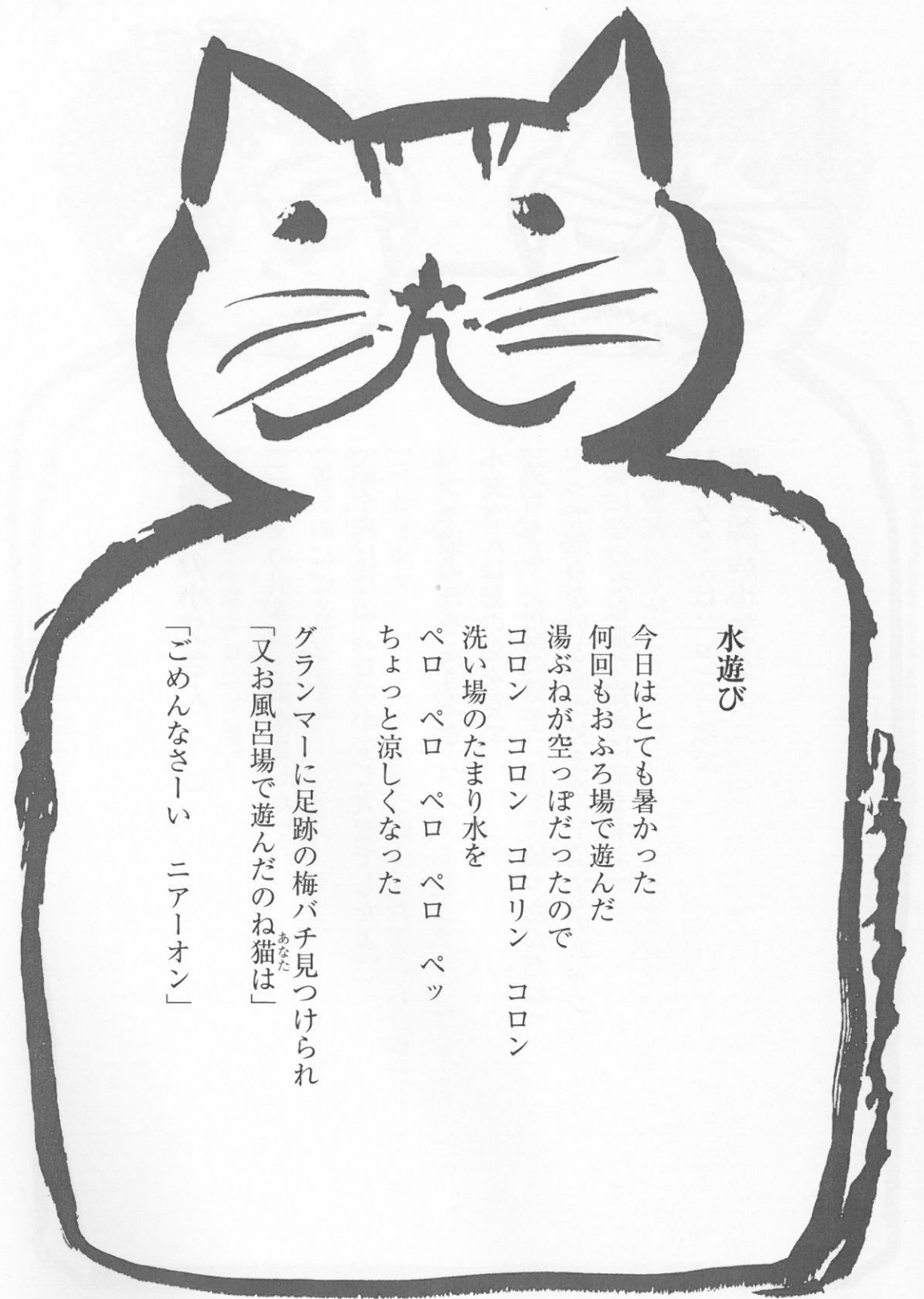
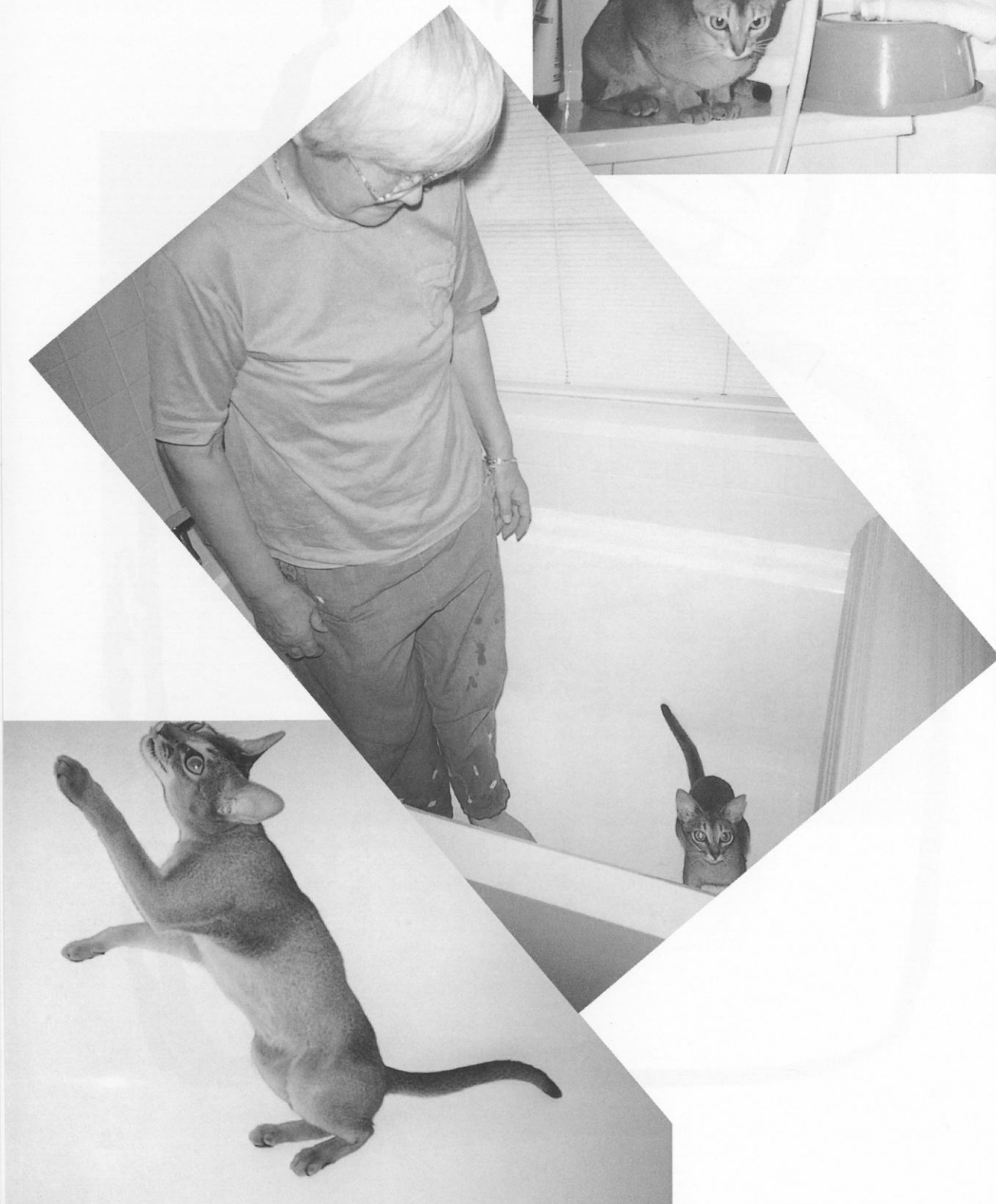
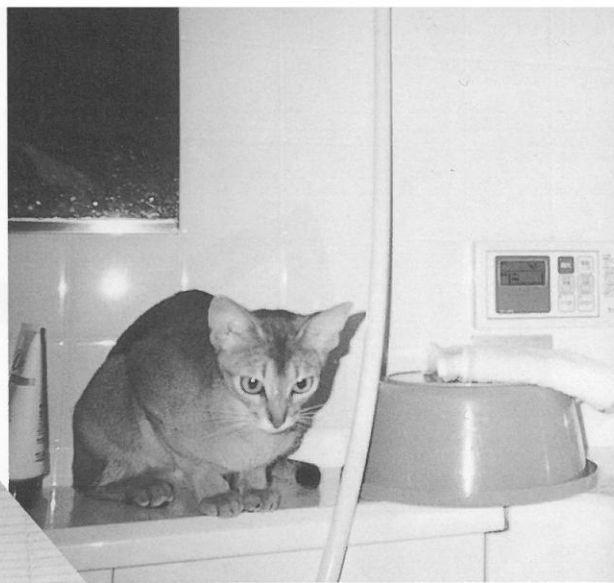
「猫ちゃん 和室の障子 はでに破ったんだね」

だって破らないと庭が見えないんだものニヤン

「秋になったら張り替えに来ますよ」

又

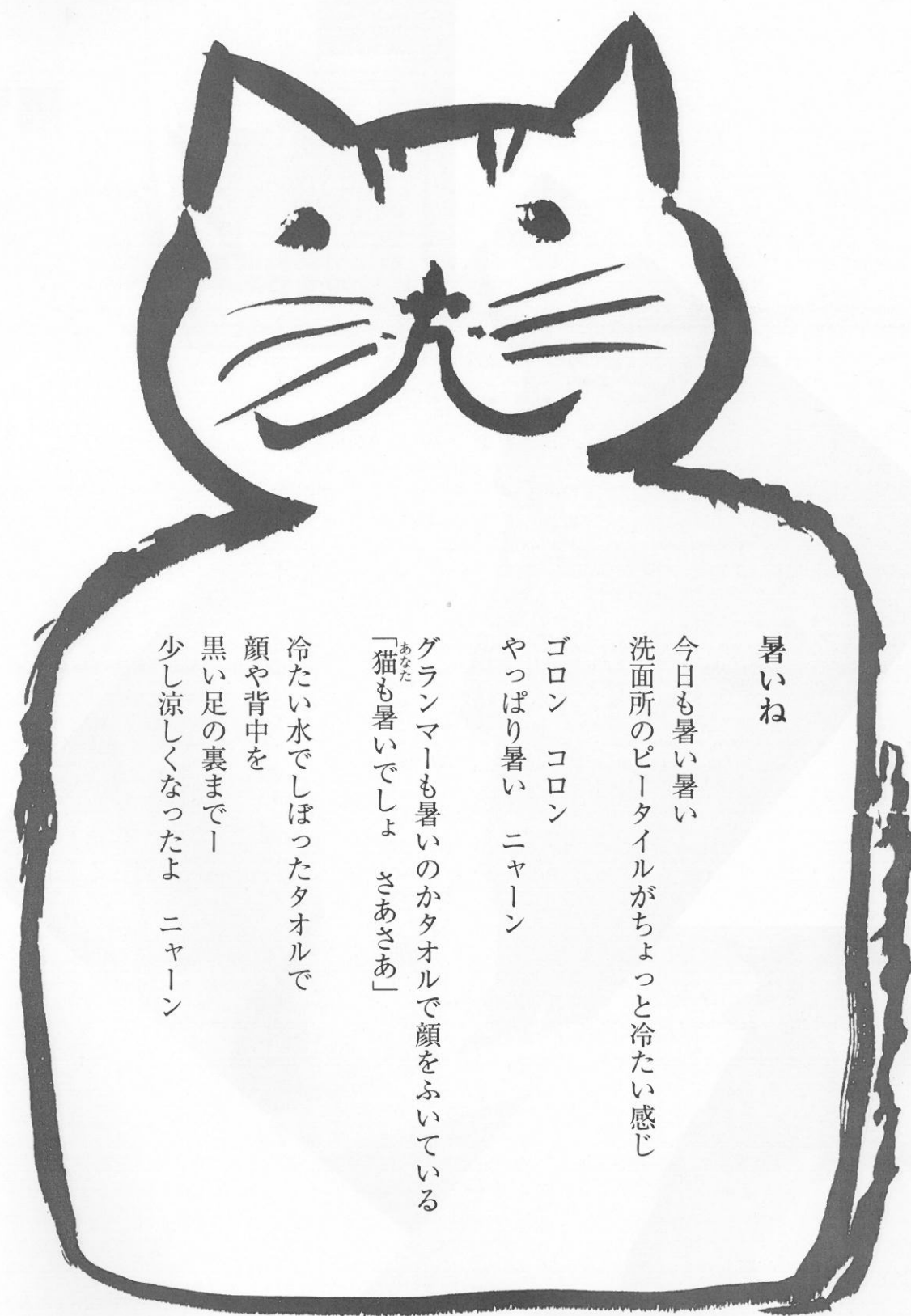
M小父さんはニコニコ顔で
帰っていかれた



水遊び

今日はとても暑かった
何回もお風呂場で遊んだ
湯ぶねが空っぽだったので
コロン コロン コロリン コロン
洗い場のたまり水を
ペロ ペロ ペロ ペロ ペッ
ちよっと涼しくなった

グランマーに足跡の梅バチ見つけられ
「又お風呂場で遊んだのね猫は」
あなた
「ごめんなさい ニアーオン」



暑いね

今日も暑い暑い

洗面所のピータイルがちよつと冷たい感じ

ゴロン コロン

やっぱり暑い ニヤーン

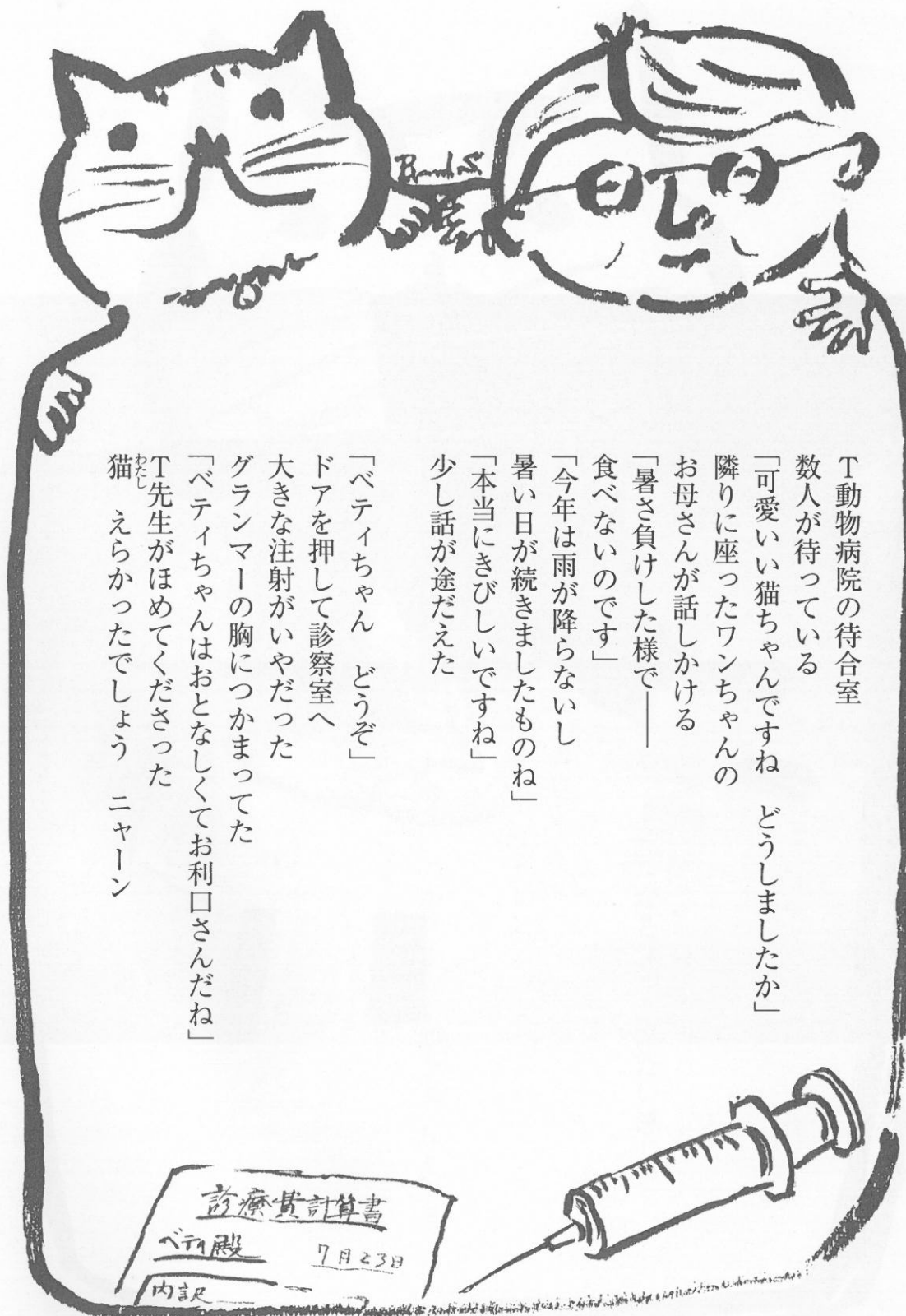
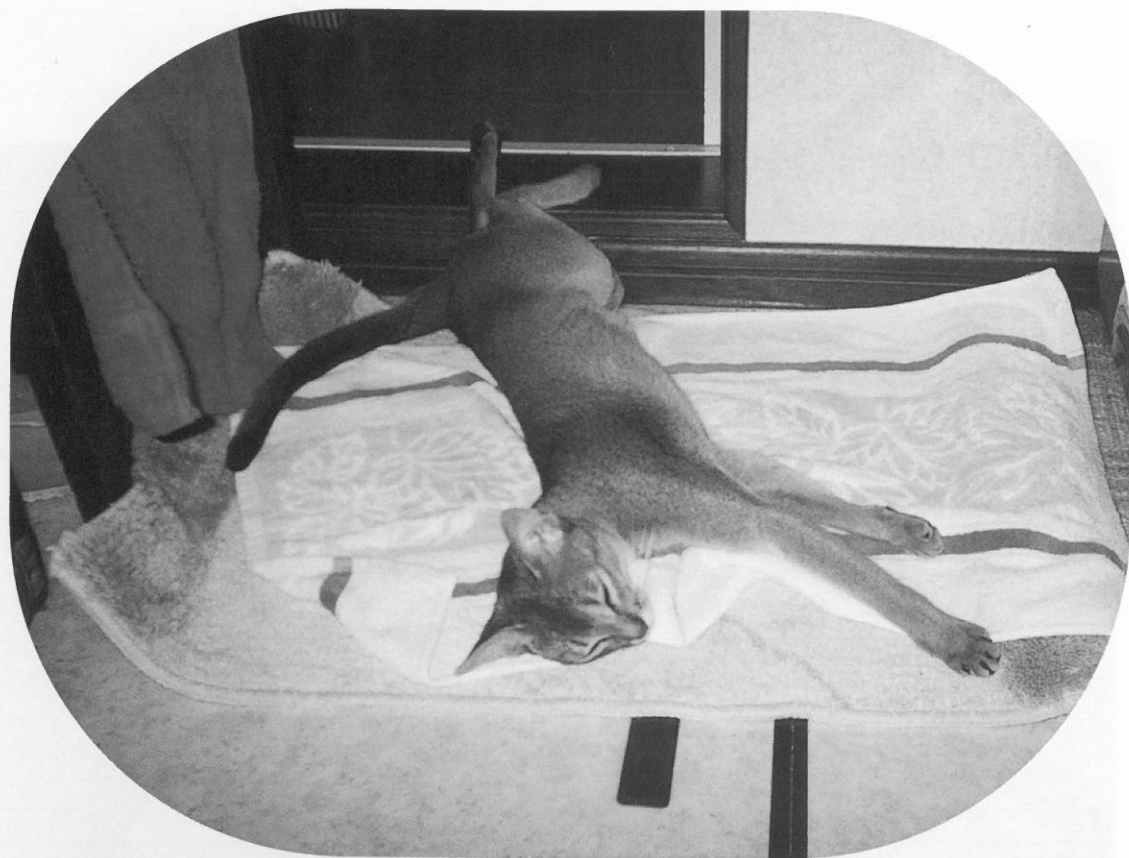
グランマーも暑いのかタオルで顔をふいている
あなた
「猫も暑いでしょ さあさあ」

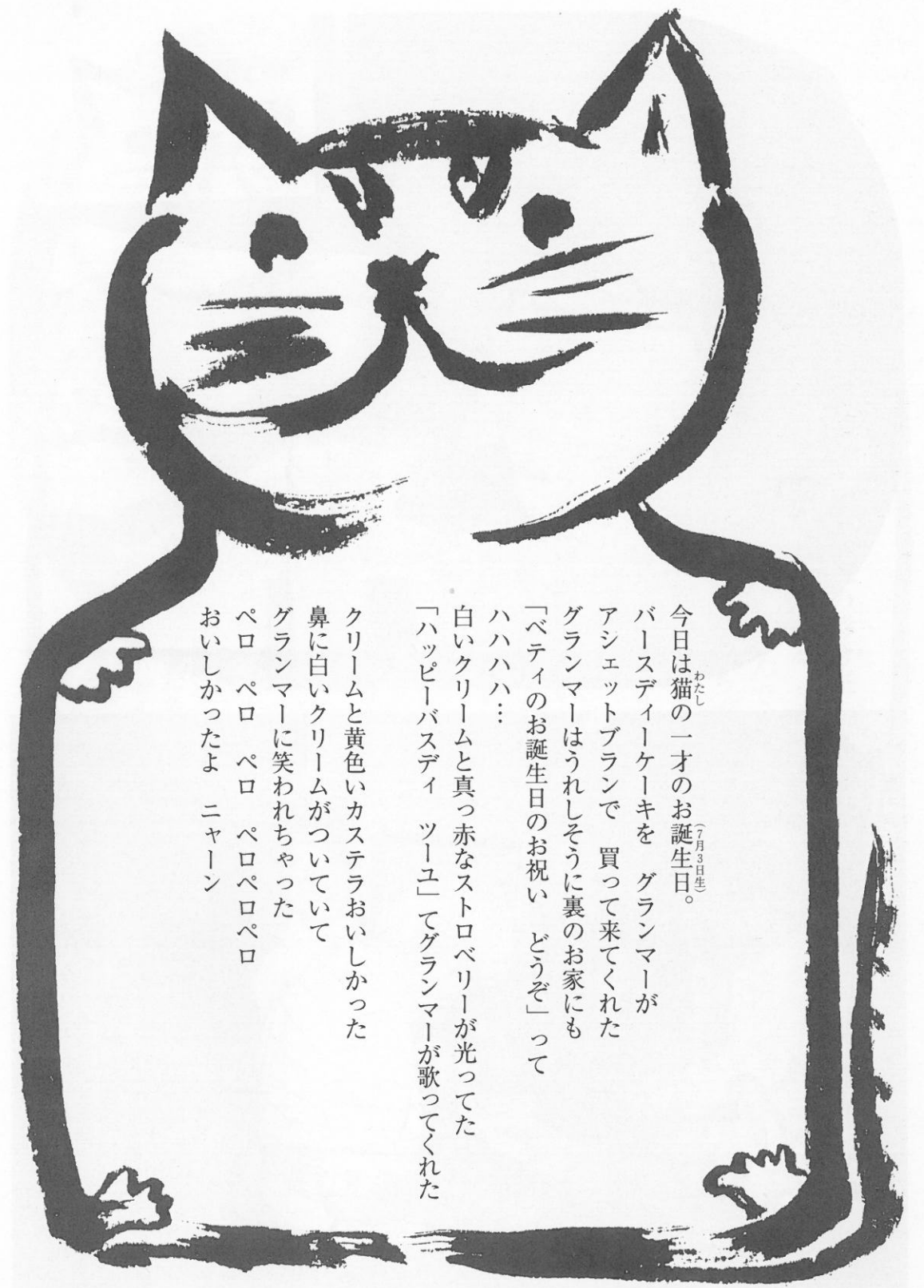
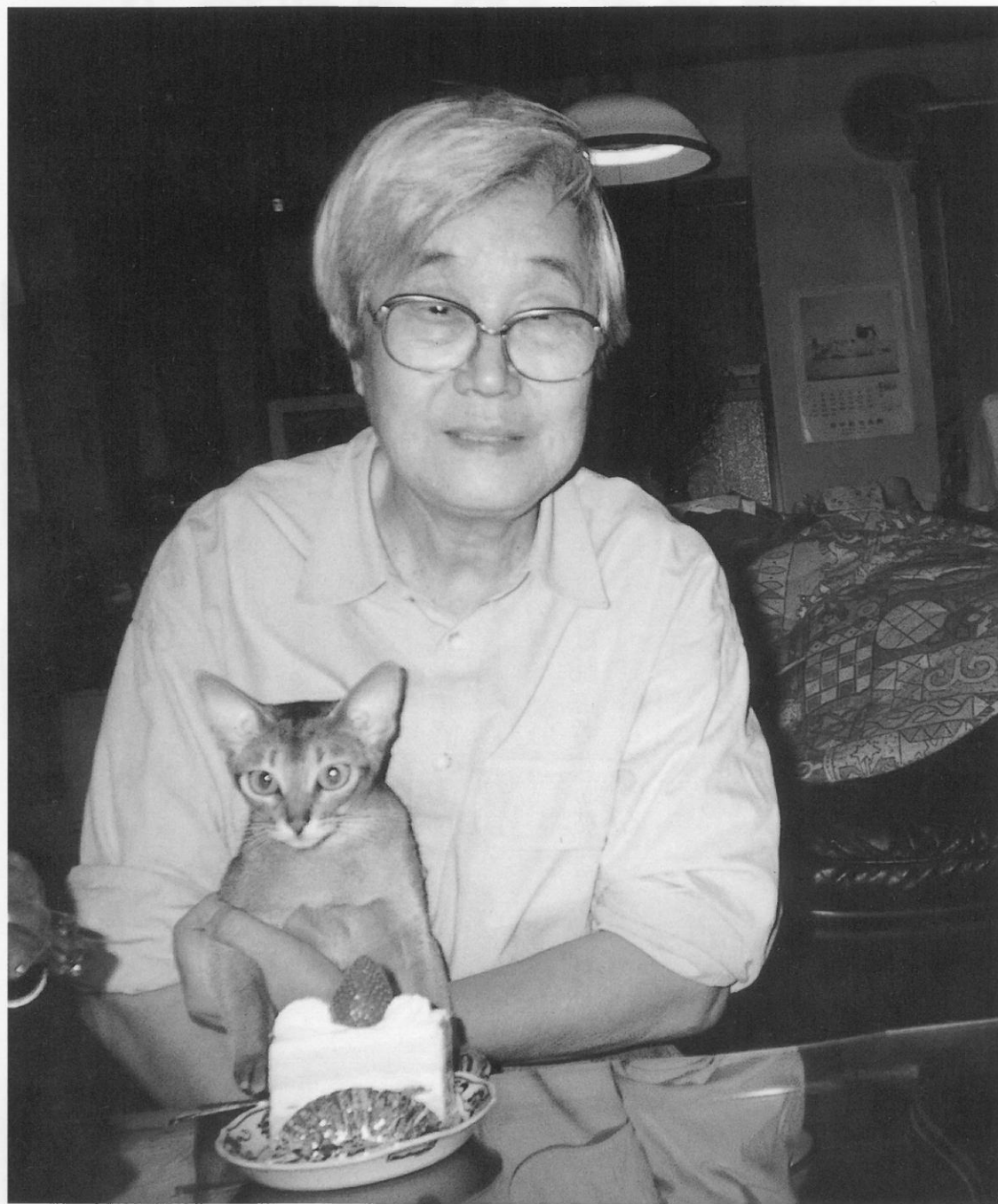
冷たい水でしぼったタオルで

顔や背中を

黒い足の裏までー

少し涼しくなったよ ニヤーン







原爆記念日に思う

八時十五分黙禱^{もくとう}

平和の鐘は

静かに平和であれ

平和であれと告げる

余韻^{よゐん}を残しながら

広島市長平和宣言

二十一世紀初めての

原爆の日

ドームは証言者として今日も

地球人へ発信している

原爆が投下された

あの日のことは私の心から

消えない 消せない

人を殺し合う戦いは

絶対やるべきではない



二人の学童の平和への誓い

小泉総理の追悼のことば

参加者のほとんどが

戦争を知らない年代に――

放送は終わった

ドビュッシーの月の光の

ピアノ曲が流れた

時は越えても月は光る

長く宇宙も平和であれと

祈らずにはいられない

ピアノの音色は私の心を

少し安らかにしてくれた

「ベティやグランマーは平和に
生き 平和に死を迎えたいよ」
わかってね



月食の夜

今夜は月食

この猫を抱いて
庭で見上げる月

二十三時二十分

半分になったおぼろな月

不思議な大宇宙の中で

共に生きようね

次回の月食も

きつと一緒に見ようね



大失敗

宅急便屋さんだ
神戸からお中元
ドアを開けた
「ブーン」

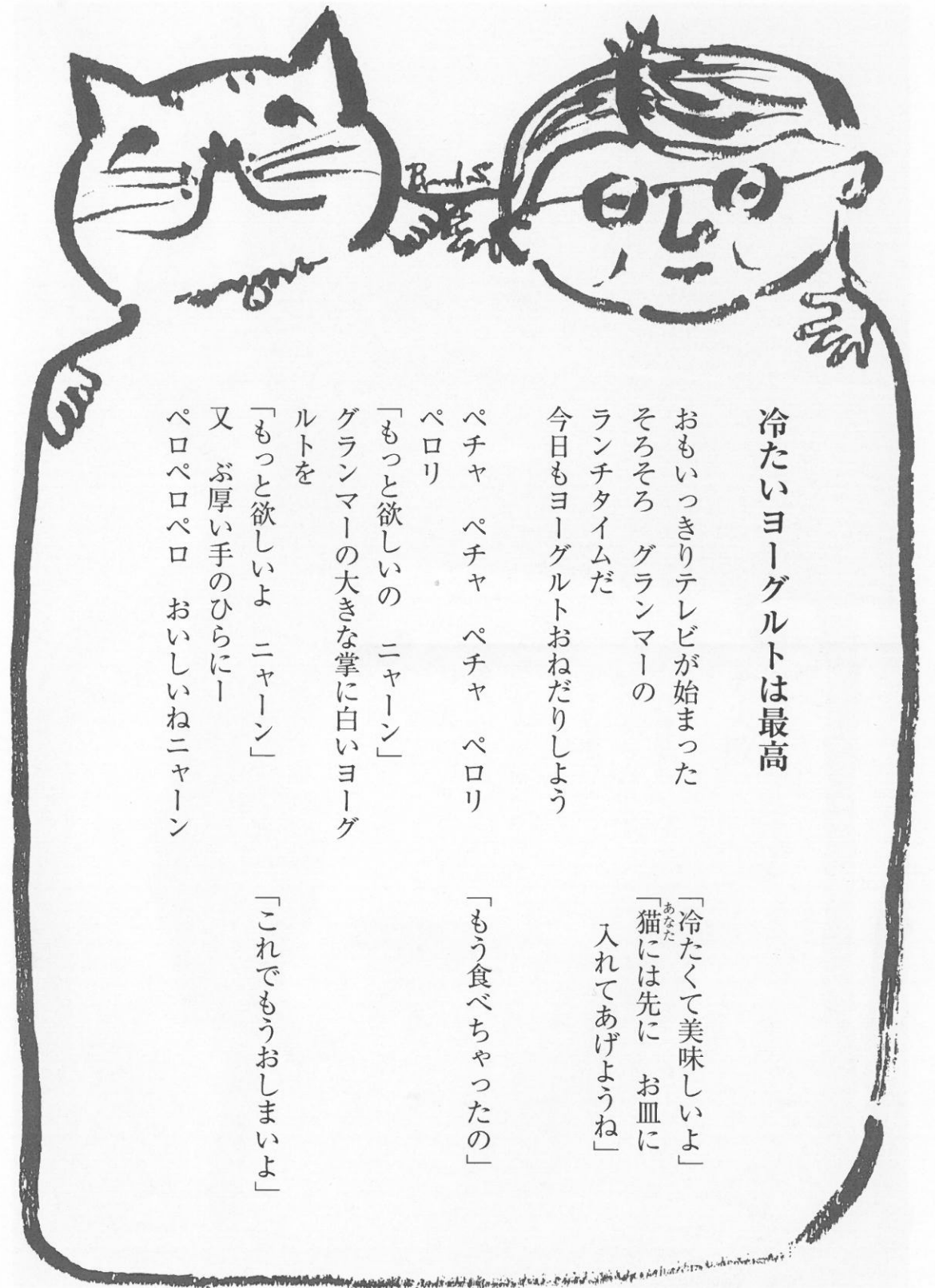
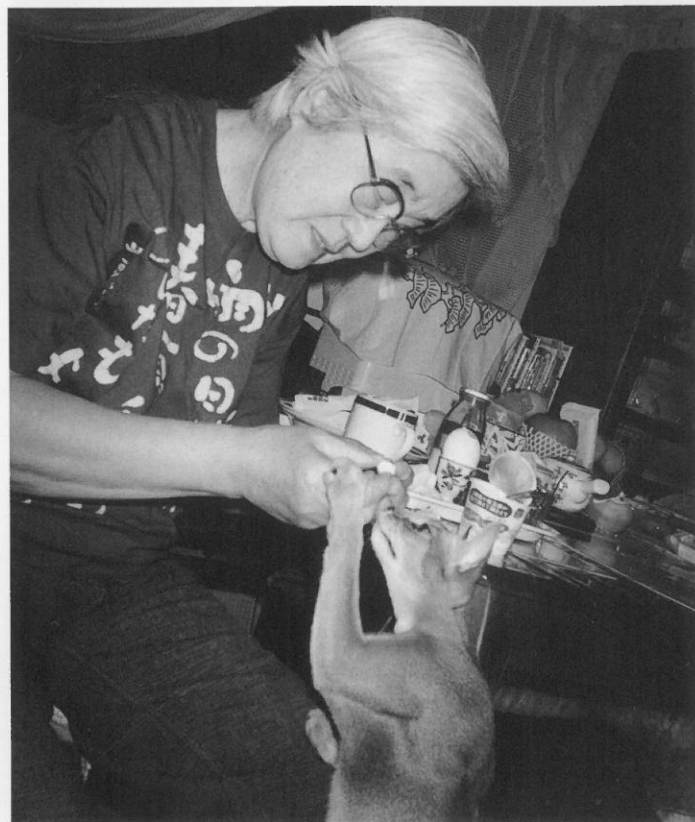
虫がとび込んできた
追いかけて追いかけて
おふろのブラインドの
むこうだ

グランマーが
パチンとたたいた
下で見てた猫の
口の中へ
ブーンとー

グランマー大あわて
猫の口を開け
老眼鏡ごしに
二回 三回口を開け
のみこんじゃったの
イヤーンだ

ビオフェルミンを
飲まされちゃった
イヤーンだった





冷たいヨーグルトは最高

おもいつきりテレビが始まった
そろそろ グランマーの
ランチタイムだ

今日もヨーグルトおねだりしよう

ペチャ ペチャ ペチャ ペロリ

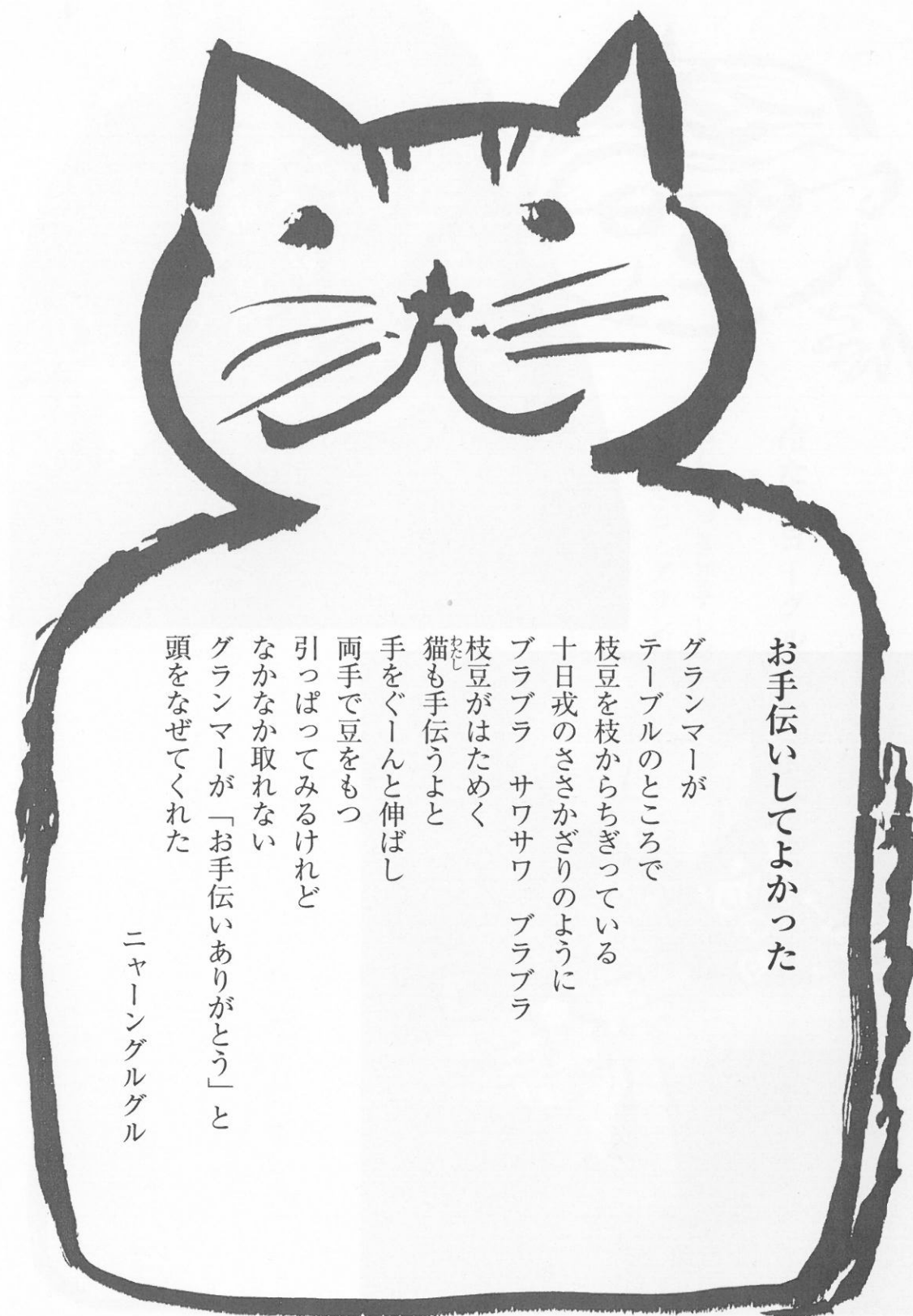
「もっと欲しいの ニャーン」
グランマーの大きな掌に白いヨーグルトを

「もっと欲しいよ ニャーン」
又 ぶ厚い手のひらにー
ペロペロペロ おいしいねニャーン

「冷たくて美味しいよ」
あなた
「猫には先に お皿に
入れてあげようね」

「もう食べちゃったの」

「これでもうおしまいよ」



お手伝いしてよかった

グランマーが

テーブルのところで

枝豆を枝からちぎっている

十日戎のささかざりのように

ブラブラ サワサワ ブラブラ

枝豆がはためく

猫も手伝うよと

手をぐーんと伸ばし

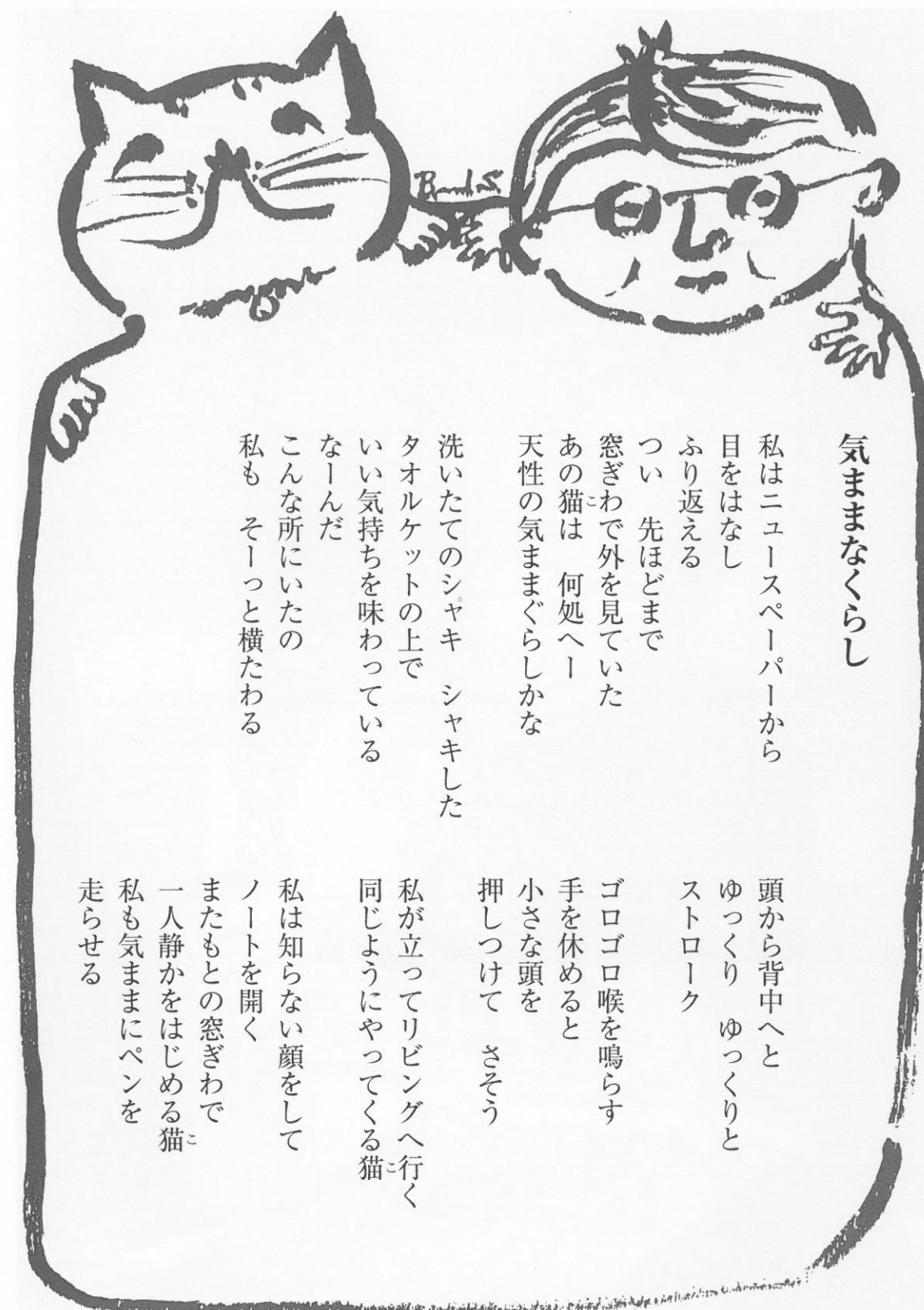
両手で豆をもつ

引っぱってみるけれど

なかなか取れない

グランマーが「お手伝いありがとう」と
頭をなでてくれた

ニャーングルグル



気ままな暮らし

私はニユースペーパーから
目をはなし
ふり返える

つい 先ほどまで
窓ぎわで外を見ていた
あの猫は 何処へー
天性の気ままぐらしかな

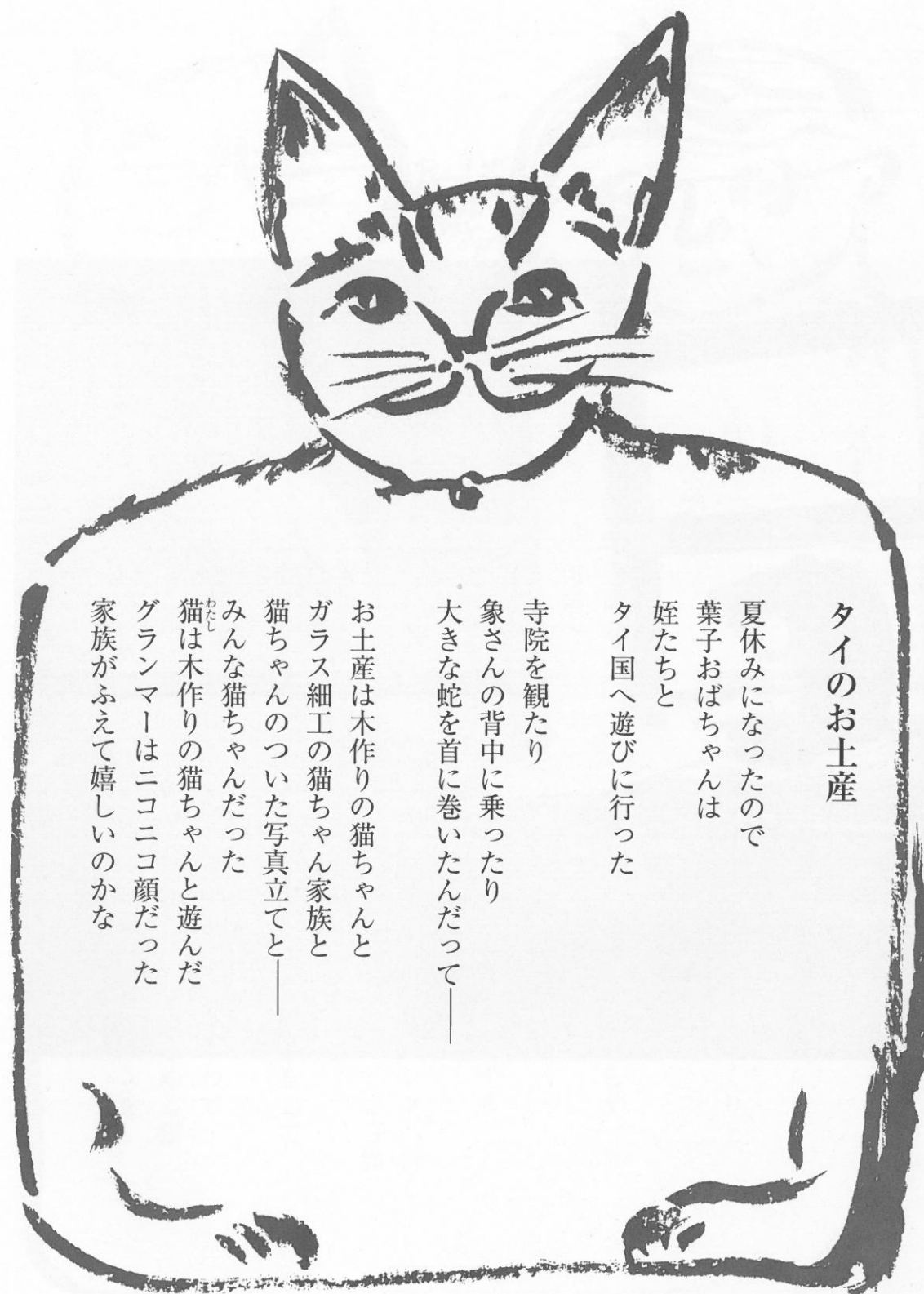
洗いたてのシャキ シャキした
タオルケットの上で
いい気持ちを感じている
なーんだ
こんな所にいたの
私も そーっと横たわる

頭から背中へと
ゆっくり ゆっくりと
ストローク

ゴロゴロ喉を鳴らす
手を休めると
小さな頭を
押しつけて さそう

私が立ってリビングへ行く
同じようにやってくる猫

私は知らない顔をして
ノートを開く
またもとの窓ぎわで
一人静かをはじめ猫
私も気ままにペンを
走らせる



タイのお土産

夏休みになったので

葉子おばちゃんは

姪たちと

タイ国へ遊びに行った

寺院を観たり

象さんの背中に乗ったり

大きな蛇を首に巻いたんだって――

お土産は木作りの猫ちゃんと

ガラス細工の猫ちゃん家族と

猫ちゃんのついた写真立てと――

みんな猫ちゃんだった

猫は木作りの猫ちゃんと遊んだ

グランマーはニコニコ顔だった

家族がふえて嬉しいのかな



夕陽無限好

散歩道に夕日の美しく見える地点がある
愛犬と歩を休め一緒に眺めたものだった
大きな大きな真つ赤な夕日だった

今は家の中から公園の木と重なる
屋根のむこうに沈む夕日をこの猫と見る

李商隠の詩の通り

限りなく美しく輝いている 落日の次に

必ず来るものを――

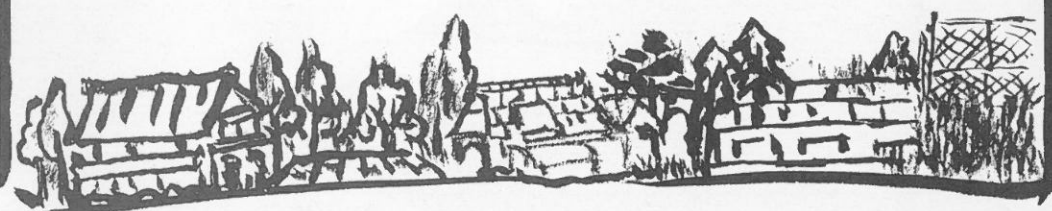
それは悲しいものでも

淋しいものでもない 生き人みな

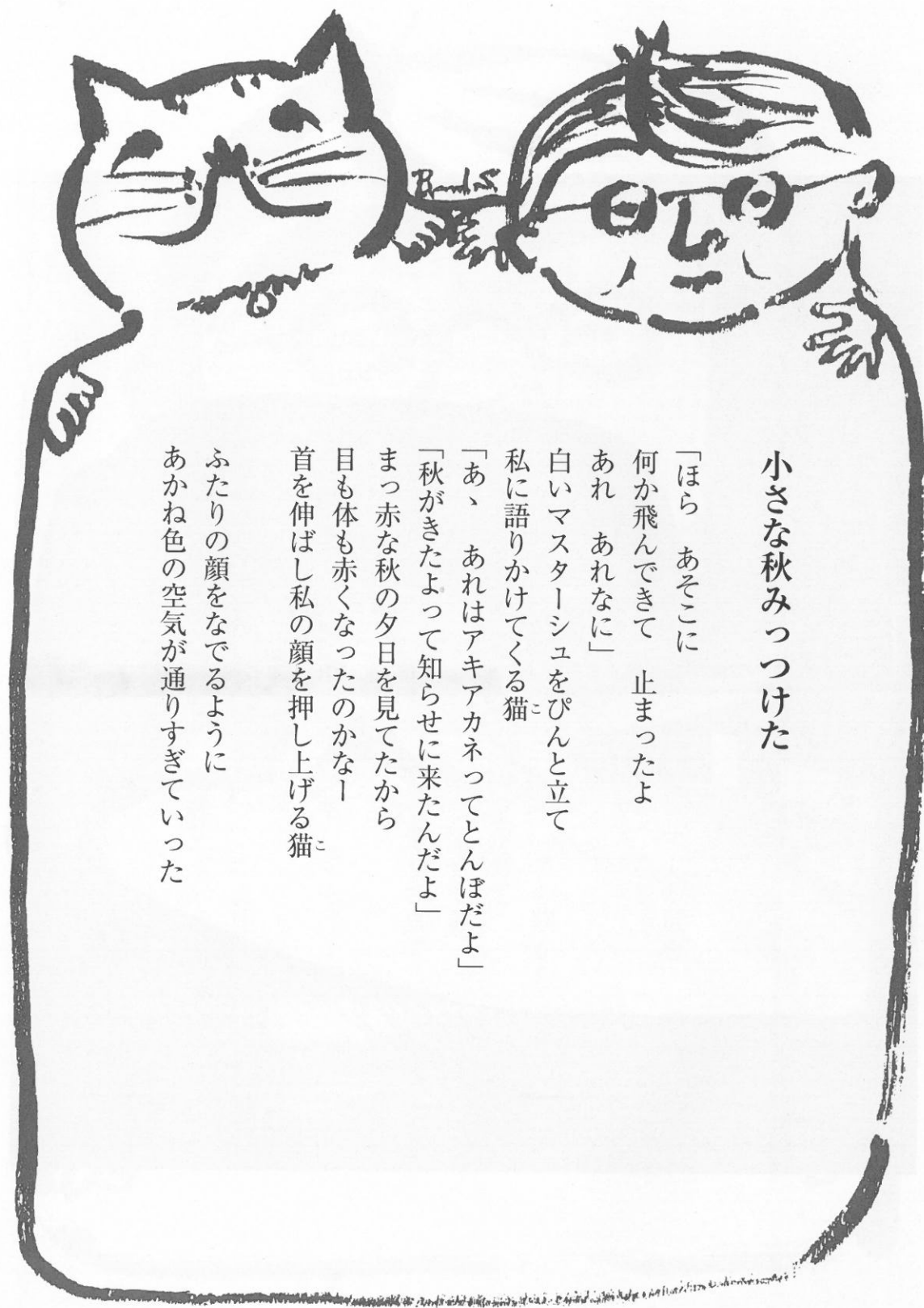
滅びの美学を感じるときがくる

だからこそこの期をこの猫と共に

大事にしたい







小さな秋みつつけた

「ほら あそこに

何か飛んできて 止まったよ

あれ あれなに」

白いマスターシユをぴんと立て

私に語りかけてくる猫

「あ、あれはアキアカネってとんぼだよ」

「秋がきたよって知らせに来たんだよ」

まっ赤な秋の夕日を見てたから

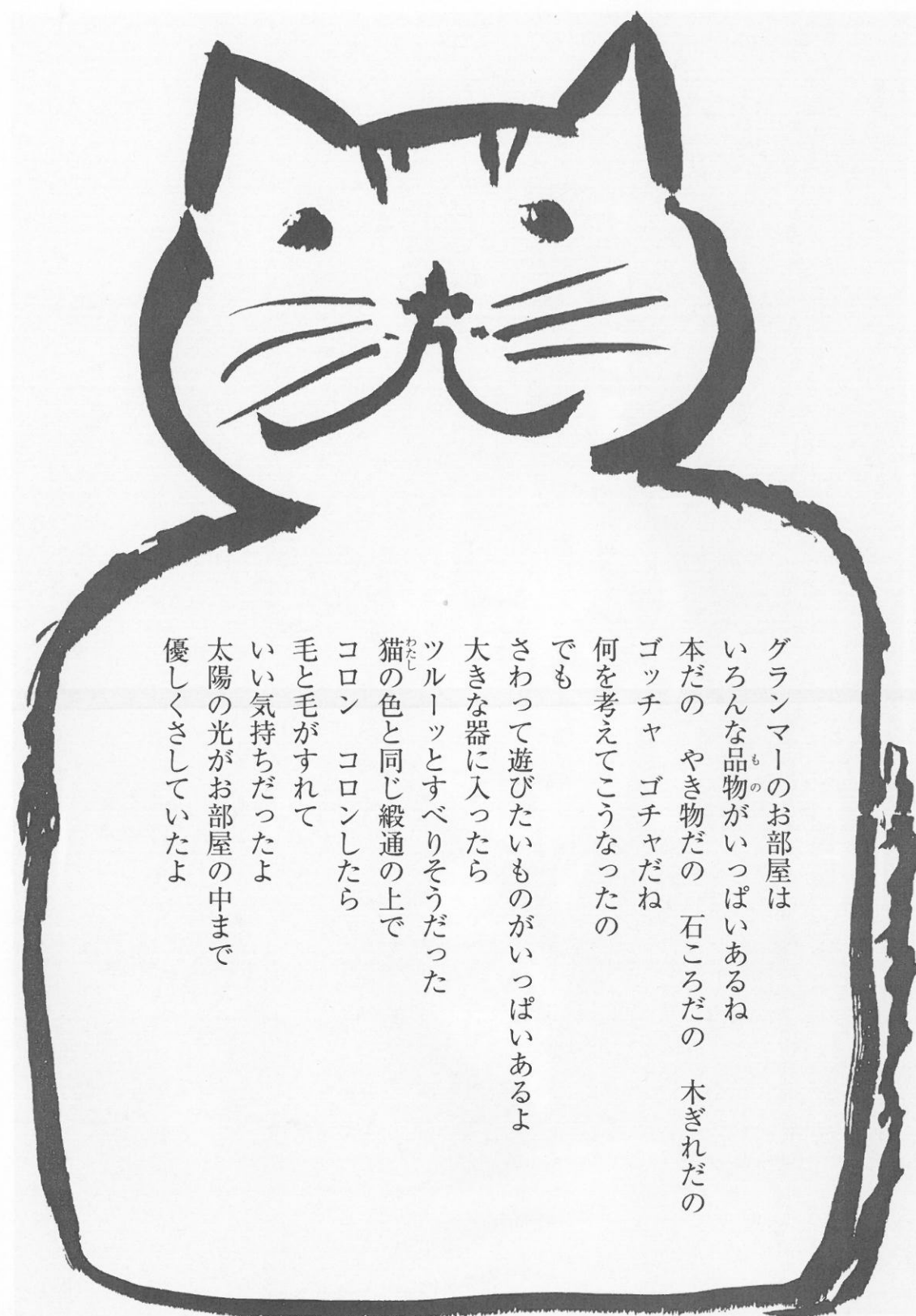
目も体も赤くなったのかなー

首を伸ばし私の顔を押し上げる猫

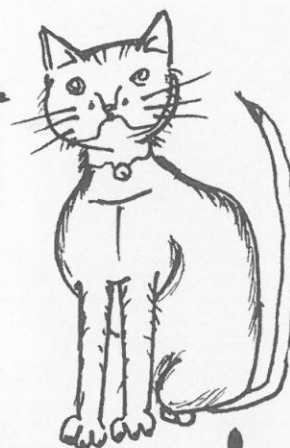
ふたりの顔をなでるように

あかね色の空気が通りすぎていった





グランマーのお部屋は
 いろんな品物がいっぱいあるね
 本だの やき物だの 石ころだの 木ぎれだの
 ゴッチャ ゴチャだね
 何を考えてこうなったの
 でも
 さわって遊びたいものがいっぱいあるよ
 大きな器に入ったら
 ツルーツとすべりそうだった
 猫の色と同じ緞通の上で
 コロン コロンしたら
 毛と毛がすれて
 いい気持ちだったよ
 太陽の光がお部屋の中まで
 優しくさしていたよ



おむかえ

あゝ

VWのエンジン音
ブーブーご主人様のおかえりだ

玄関マットの上に
おすまし顔で
お出むかえだ
それ 急げ

こま犬も
すまし顔で
座っている

ガチャ ガチャン

「ただいま」

「おむかえありがとう」

ほら

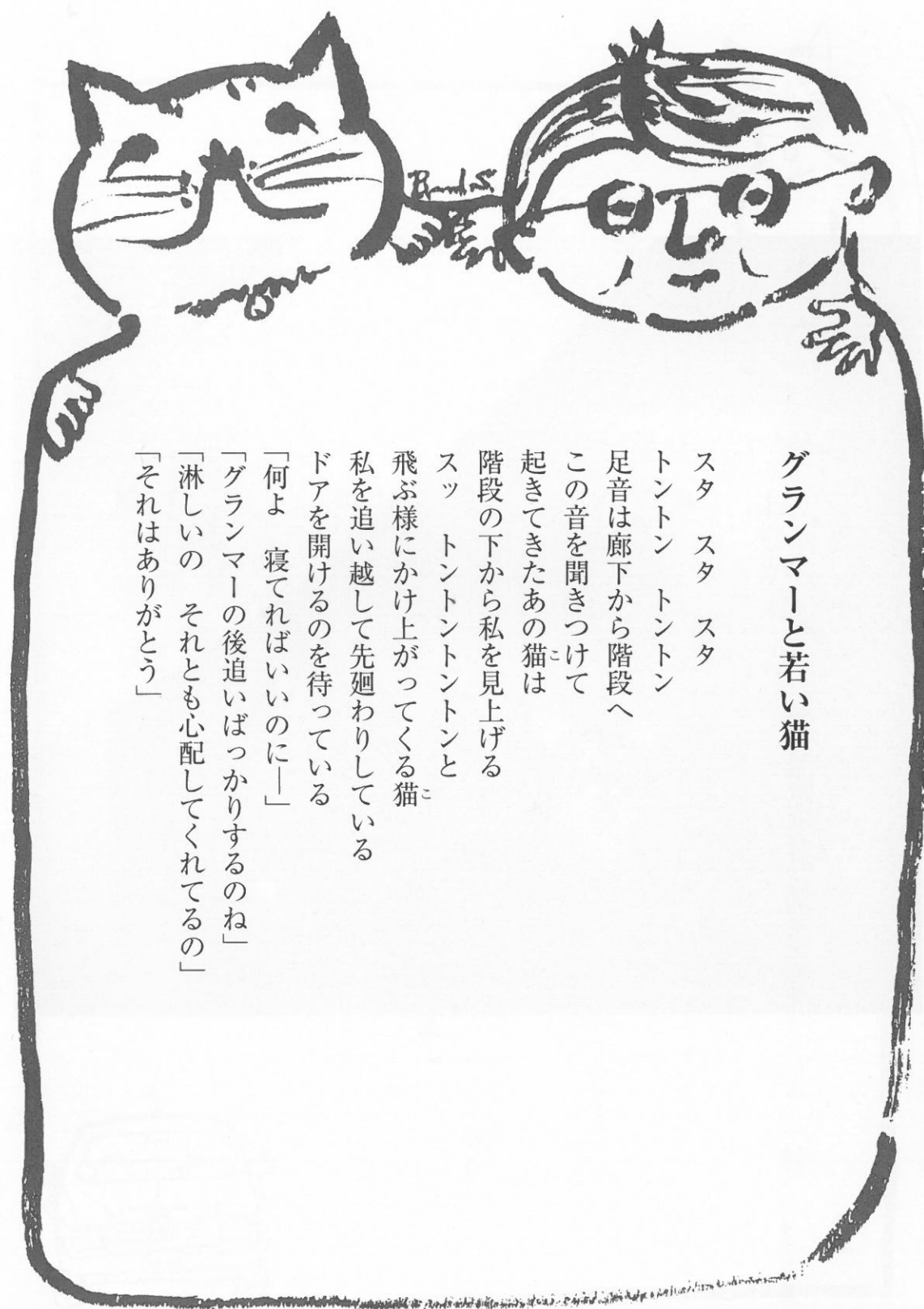
抱き上げてチュッするよ

猫のご主人様は

「チュウ チュッ」

イヤーン ニヤン





グランマーと若い猫

スタ スタ スタ

トントん トントん

足音は廊下から階段へ

この音を聞きつけて

起きてきたあの猫は

階段の下から私を見上げる

スツ トントントントんと

飛ぶ様にかけ上がってくる猫

私を追い越して先廻りしている

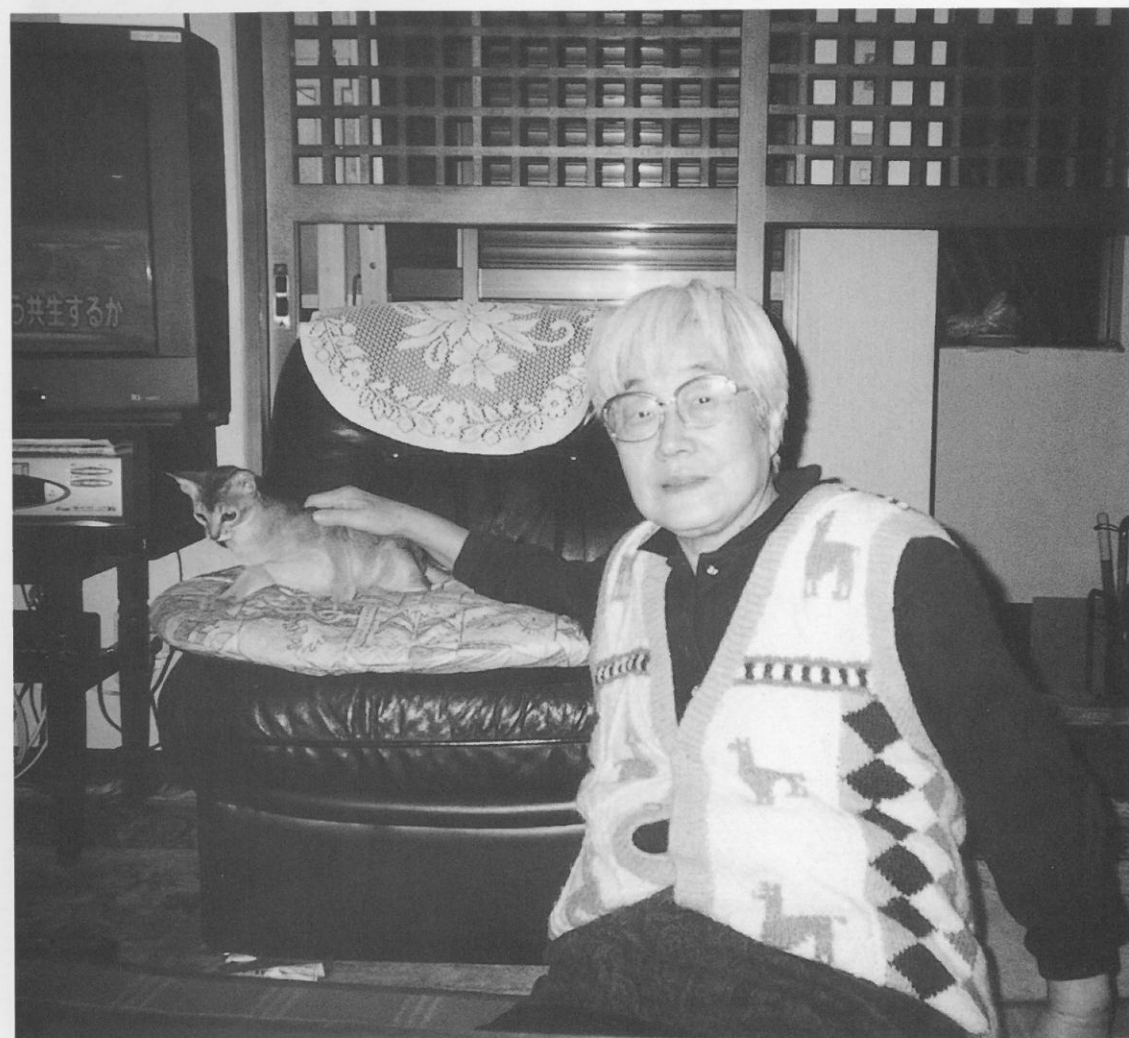
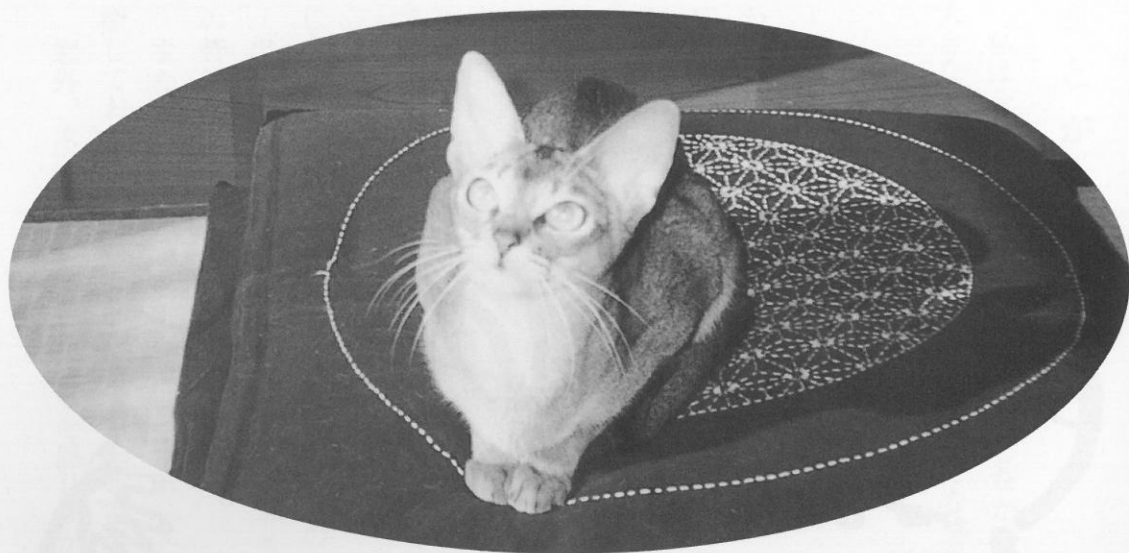
ドアを開けるのを待っている

「何よ 寝てればいいのに——」

「グランマーの後追えばっかりするのね」

「淋しいの それとも心配してくれてるの」

「それはありがとう」





あとがき

私は今「あとがき」の筆を手にながら、若い頃に読んだワーズワースの詩「虹」を思い浮かべています。空にかかった大きな大きな美しい虹を見ているような感動と、何とも言い得ない心の平静さとやすらぎの気分に取り込まれています。

虹

わが心はおどる
虹の空にかかるを見るとき。
わがいのちの初めにさなりき。
われ、いま、大人おとなにしてさなり。
われ老いたる時もさあれ、
さもなくば死ぬがまし。
子供は大人の父なり。
願わくばわがいのちの一日一日は、
自然の愛により結ばれんことを。
(William Wordsworth)

この猫とすごした一年間のくらしぶりを一篇にまとめてみました時、何と他愛なく稚拙で浅薄なものと恥ずかしくなっています。しかし、思いのままをさして巧むことなく、童わらわのような気持ちで表現できたのではないかとも思っています。心を痛める出来ごとの多い昨今のこと、拙文ではありますが、ひと時でもくつろいだ気分であっていただければ幸いです。また、この冊子を通じて愛猫家の方々との交流の環がひろげられるならば、更に幸せなことで存じます。

出版に際しまして、出版社をご紹介下さった写真家の小沼諭様、ヤマケイ・プランニングの市川泰雄様をはじめスタッフの皆様、心からお礼を申し上げます。

また、私とこの猫との出会いを下さったブリーダーの田口様ご夫妻には、常に優しくご指導や、ご援助をしていただき感謝しております。また、いろいろお世話になった多くの方々のお支えに深謝申し上げます。窓外、木々の梢に春のきざしを感じながら――。

平成十四年三月